

陶器南遺跡発掘調査概要・VII

—府営ほ場整備事業陶器北地区に伴う調査—

2000. 3

大阪府教育委員会

はしがき

陶器南遺跡は堺市の東南部、陶器北地区を中心に広がる遺跡です。周辺は都市化の進む大阪府下にあって現在も比較的まとまった農地が広がり起伏に富んだ古くからの地形が良く残されています。

この地は「陶器」という地名が雄弁に物語るように、古墳時代から古代にかけての日本最大の須恵器生産地であった陶邑窯跡群があることでよく知られています陶器南遺跡の近辺にも須恵器窯が分布していることが知られており、式内社である陶荒田神社が鎮座することから、この遺跡は陶邑窯跡群と密接な関係をもった遺跡であると考えられています。

本府教育委員会では府営は場整備事業「陶器北地区」の実施に伴う陶器南遺跡の発掘調査を平成5年度から継続して実施しています。既往の調査では須恵器生産にかかわったと見られる人々の集落跡など古墳時代後期を中心とする遺構、遺物が多数検出されています。また中世の居館跡をはじめとする平安時代から中世の遺構も存在することから、「陶邑」以降の様子も徐々に明らかになっています。

今年度の調査では平安時代後期～中世の掘立柱建物をはじめとする多数の遺構を検出した他、調査区内に埋没していた谷からは本遺跡東方に存在する須恵器窯から流されてきたと見られる古墳時代から平安時代の須恵器が多量に出土しました。加えて江戸時代の初めに丘陵が再開発され、現在の景観が成立していく過程が一層明らかとなり、地域の歴史の解明に貴重な資料を得ることができました。

調査に際してご協力頂きました地権者各位をはじめ、関係各位、諸機関に感謝の意を表するとともに、今後とも文化財保護行政に変わらぬご理解とご協力をお願いする次第であります。

平成12年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 小林 栄

例　　言

1. 本書は府営圃場整備事業「陶器北地区」予定地内、堺市陶器北・上之に所在する陶器南遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は大阪府環境農林水産部より依頼を受け、大阪府教育委員会文化財保護課が実施した。
3. 調査は大阪府教育委員会文化財保護課調査第1係技師地村邦夫を担当として、現地での発掘調査を平成11年9月から始め、12月まで実施した。遺物整理・概要報告書作成は地村および資料係技師井西貴子を担当として現地調査と並行して実施し、平成12年3月末日に終了した。
4. 調査の実施にあたっては地権者各位をはじめ堺市陶器北地区土地改良区、大阪府農と緑の総合事務所堺分室、堺市教育委員会など多くの方々のご協力をいただいた。深く感謝の意を表したい。
5. 本文、挿図に用いた標高は東京湾標準潮位（T.P.値）で示した。また座標は国土座標第Ⅳ系によるものであり、北はすべて座標北を示す。
6. 土層の記載に用いた色調は『新版 標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）1994年によっている。
7. 本書の執筆・編集は地村が行った。

本 文 目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 調査の方法	2
第3章 調査結果	4
第1節 第1調査区の調査結果	4
第2節 第2調査区の調査結果	14
第3節 第3調査区の調査結果	17
第4節 第4調査区の調査結果	21
第5節 第5調査区の調査結果	24
第6節 第6調査区の調査結果	27
第7節 第7調査区の調査結果	31
第8節 第8調査区の調査結果	35
まとめ	36
報告書抄録	

第1章 調査に至る経過

陶器南遺跡は堺市上之・陶器北地区に所在する。本遺跡は南東から北西に向かって伸びる丘陵地の先端部に位置している。本遺跡は古墳時代から古代にかけての日本最大の須恵器の生産地であった陶邑窯跡群の北に隣接し、既往の調査では、古墳時代および奈良時代の須恵器生産に関連したと考えられる集落が検出された。また平安時代後期～中世の集落・居館跡が検出され、古墳時代から鎌倉時代までの大複合遺跡であったことが明らかにされている。

大阪府農林水産部（現：環境農林水産部）では、土地の有効利用と農業経済の安定を計る目的から、本地域において緑住区開発関連土地基盤整備事業「陶器北地区」を計画した。この計画地内には周知の埋蔵文化財包蔵地として陶器千塚古墳群、陶器南遺跡、上之遺跡が確認されていた。そこで、大阪府教育委員会では、この取り扱いについて農林水産部と協議した結果、平成3年度から計画地内における試掘調査を実施することとなった。

初年度の平成3年度にはまず陶器千塚古墳群の試掘調査を実施し、削平された数基の古墳の周濠を確認した。そこで平成4・5年度に本調査を実施した結果、既に多くの古墳が失われているものの、「千塚」と称された古墳群の様相の一端を明らかにした。また平成5年度には遺跡の範囲外であった事業計画地南部の試掘調査を実施したところ、遺構・遺物が試掘調査範囲全体に広がっていることが明らかになったため、陶器南遺跡の範囲を拡大した上で、平成6年度から本調査を実施している。

今年度は「新池」の周辺を中心に8ヶ所の調査区を設定し、調査を実施した（第1図）。



第1図 調査地点 ($S=1/25,000$)

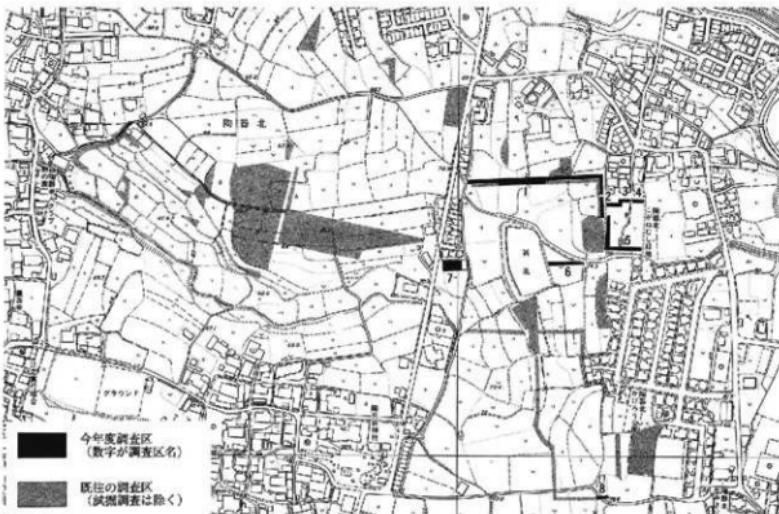
第2章 調査の方法

(1) 調査区の設定と掘削方法（第2図）

調査対象地は新設の道路および用排水路によって遺構面が削平される区域である。ただし現在の用水路、耕作地の段の存在により実質的に調査が不可能な部分も存在した。こうした地点で調査区を分けることにより、全部で8調査区を設定した。調査面積は計1,594m²である。

調査は第7調査区から開始し、以下第4→3→5→6→2→1→8調査区の順に実施した。現在の耕作土と床土を重機により掘削し、以下を人力で掘削した。

また第1～6調査区についてはヘリコプターによる航空写真測量を実施した。



第2図 調査区位置図 (S=1/5,000)

(2) 地区割り（第3図）

大阪府教育委員会では、平成8年度から発掘調査にあたっては（財）大阪文化財センター（現：（財）大阪府文化財調査研究センター）の地区割りに依拠した共通の地区割りを採用している。((財)大阪文化財センター『遺跡調査基本マニュアル』1988年)。

本地区割り方法は国土座標第VI系に基づいており、6段階の区画からなっているが、各遺跡の状況によって必要な地区割りの精度が異なることから、4段階の区画までは全ての調査で実施し、必要に応じてそれ以下の地区割りを行うこととしている。

第1区画は大阪府が設定している1万分の1の地形図を使用したもので、縦6km、横8kmの区

画である。南西隅を起点として、縦軸をA～O、横軸を0～8とする。

第II区画は第I区画を16区画した縦1.5km、横2kmの区画であり、2500分の1地形図1枚の範囲である。南西隅の区画を1として東に進み、北東隅の区画を16とする。

第III区画は第2区画を100m単位で区切り、縦15、横20の区画としたものである。本区画からは第I・II区画と異なり北東隅を起点とし、横軸を1～20、縦軸をA～Oとする。

第IV区画は第III区画を10m単位で区切り、縦10、横10の区画としたものである。北東隅を起点とし、横軸を1～10、縦軸をa～jとする。

第IV区画以下の単位としては、第IV区画を5m単位に4分割する第V区画と第VI区画内の位置を北東隅を起点として必要な精度で表示する第VI区画の二つが規定されているが、本調査では採用していない。

以下の記述では便宜上調査区西半部や東半部といった表現の方が分かりよい場合、あるいは特定のポイントを座標を用いて示す場合を除いて、遺構の位置や遺物の出土位置など全て本地区割りで示している。

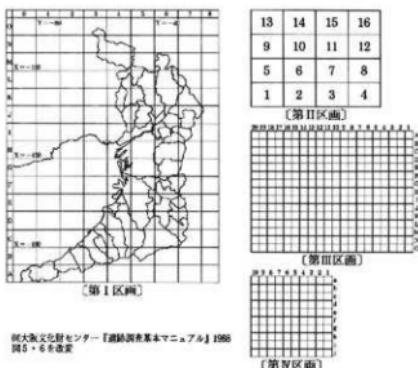
(3) 遺構番号

遺構番号については調査区の別、遺構の種類に関係なく、通し番号をつけている。例えば遺構番号1は第7調査区の溝1のみであり、他の調査区および他の種類の遺構には存在しない。番号を付ける順序は基本的に検出順であるため、同時に複数の調査区の調査を実施している場合は、一調査区内で番号が連続しないこともある。これは後の整理作業の結果、遺構の種類・名称に変更があった場合も遺構の番号は不変とすることによって混乱が生じることのないようにするためにあり、やはり本府教育委員会では平成8年度からこの方法をとっている。

なお2棟検出した掘立柱建物については、建物を構成する柱穴の番号以外に、建物としての番号を付しているが、これも他の遺構と同じく通し番号の一つである。

(4) 土色

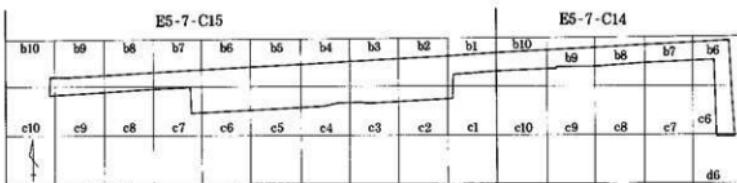
例言にも述べたように、本調査では土色の表示は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』1994年に基づいている。



第3章 調査結果

第1節 第1調査区の調査結果（図版1～3）

本調査区は今年度調査区の中で最も広い調査区である。調査区はL字状に屈曲しており、総延長は約155m、幅は中央部が8.8m、他は3.5mである。面積は794m²である。



第4図 第1調査区地区割図（S=1/1,000）

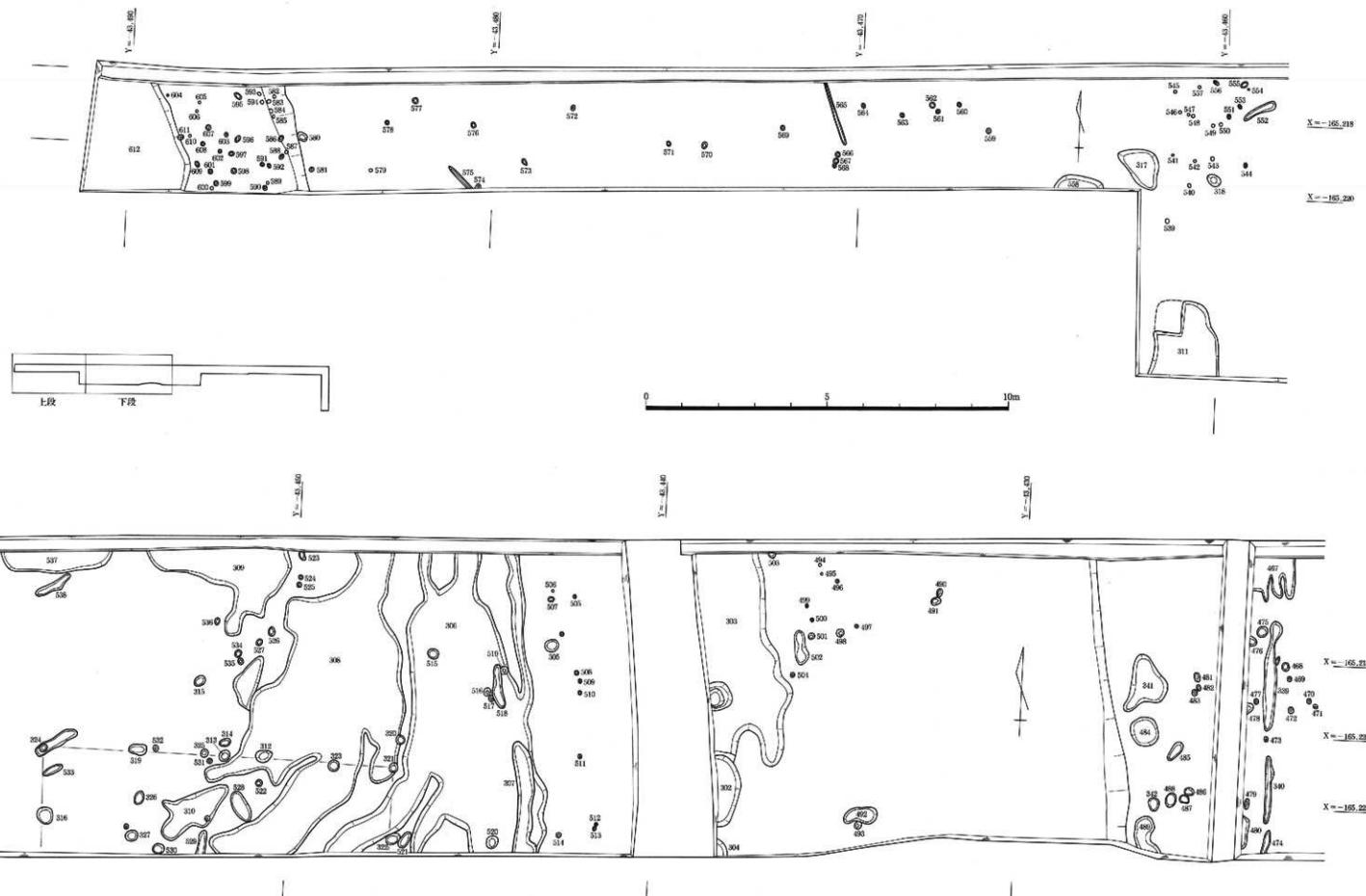
（1）基本層序（第7図）

最上層は耕作土（1・2）、その下層は床土（3）である。層厚は耕作土が0.2m、床土が0.1mである。床土の下層が近世耕作土（4・6・8）である。1枚の耕作地の中でも丘陵下方にある側には盛土を繰り返しており、層厚は最大0.6mに及ぶ。近世耕作土の下層が中世遺物包含層（9・10）である。層厚は0.1～0.2mほどであるが、図示した範囲内は最も残りがよく、中世遺物包含層が2層認められ、両層を合わせた層厚は最大0.3mに及んだ。本層の下層は地山（5）である。地山層上面が遺構面である。本層上面には鉄分・マンガンが沈着している。なお遺構面のレベルはT.P.+70.1～73.9mである。

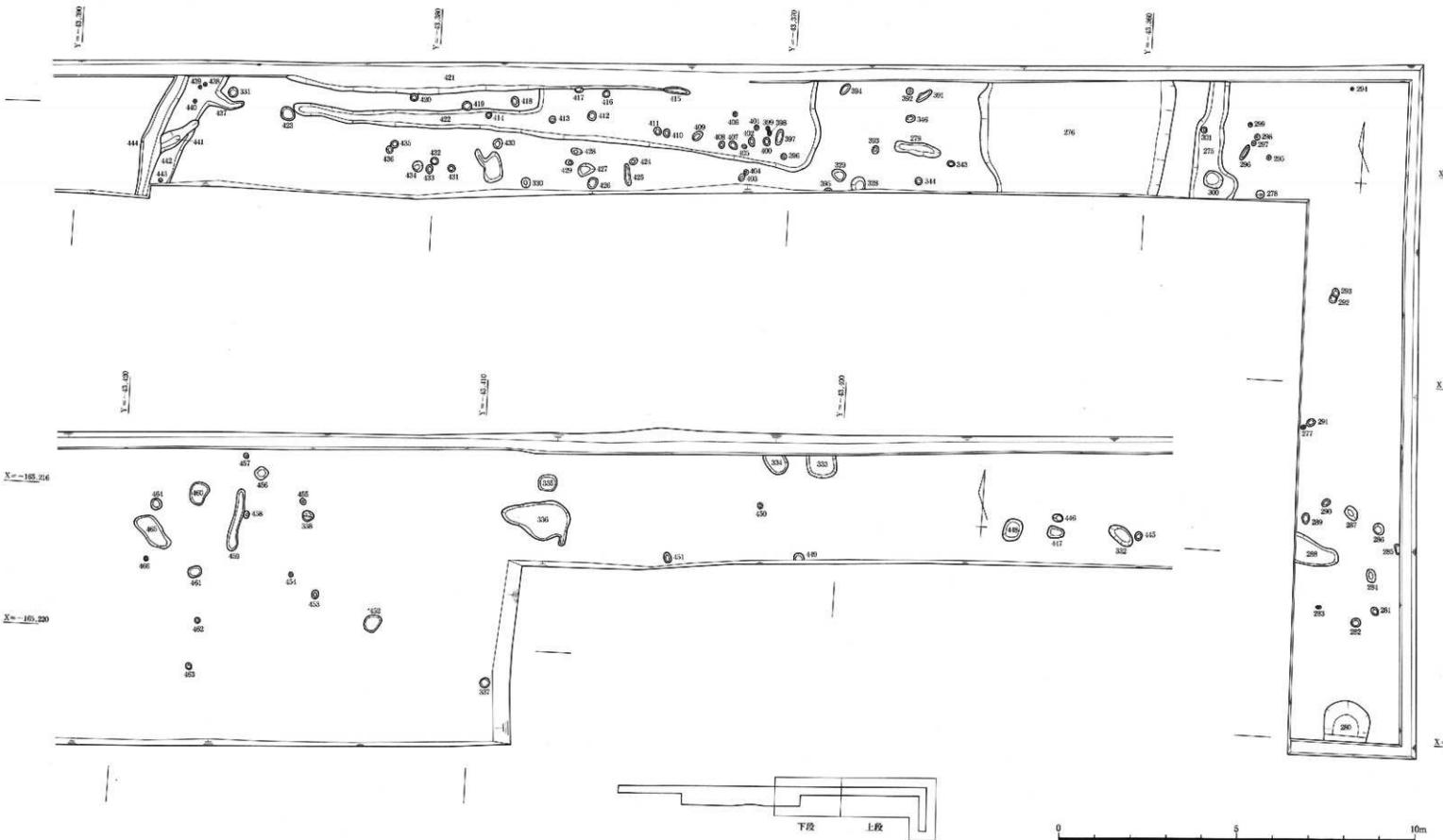
（2）主な遺構と遺物（第5・6図）

本調査区は東西に長いために、遺構の種類とその粗密には地区により大きな差がある。

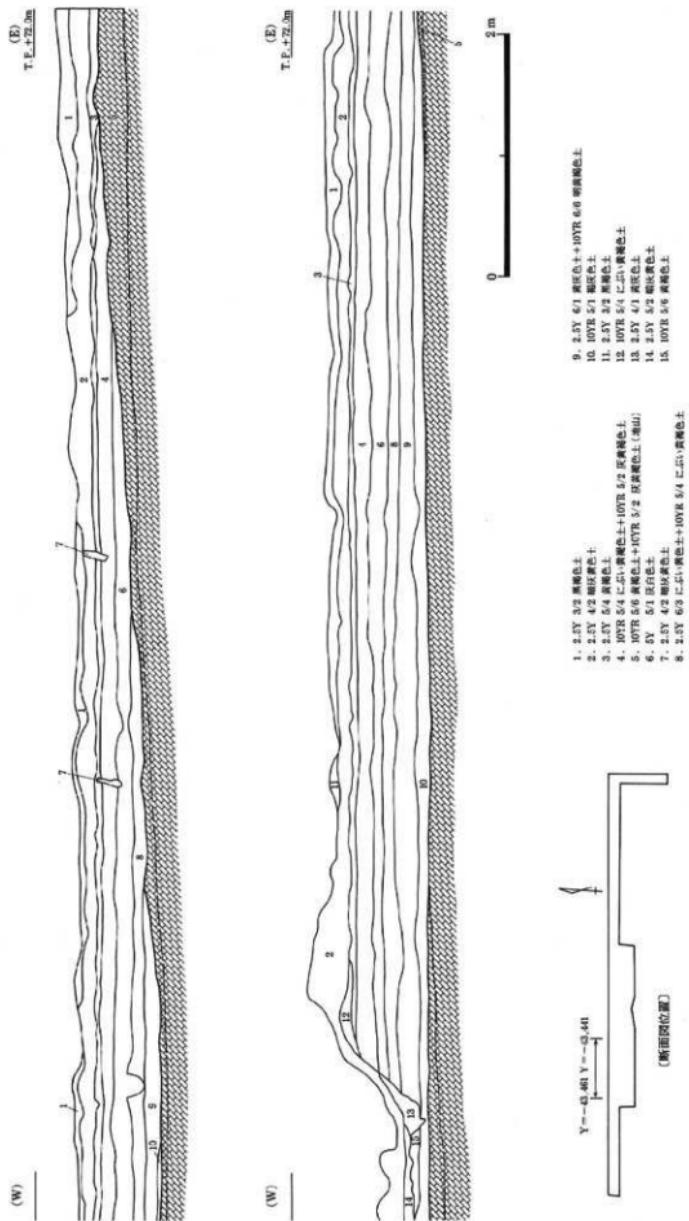
調査区西端部（E5-7-C15-b7～b10）では、検出した遺構の大半が近世以降の杭跡であった。調査区中央部（E5-7-C15-b2～b6・c2～c6）ではピットを多数検出し、鎌倉時代の掘立柱建物1棟を復元した。不定形の溝状遺構は耕作に伴う痕跡の可能性があるが、切り合い関係から建物より新しく、建物廃絶後の状況を示していると考えられる。また奈良時代の土坑1基を検出した。調査区中央部は既往の調査結果から遺構の密度が低いと推測していたが、逆に中世の遺構が集中することが判明したことは成果であった。この東側（E5-7-C14-b10、E5-7-C15-b1）では遺構はほとんど検出されなかった。ここは平成7年度4a区と5区に挟まれた区間で、両調査区とも遺構の密度は低い。調査区東端部（E5-7-C14-b6～b9・c6）では再び土坑、ピットなど多数の遺構を検出した。また調査区南端部では瓦等を出土した土坑1基を検出した。



第5図 第1調査区平面図(1) (S=1/100)



第6図 第1調査区平面図（2）(S=1/100)



第7圖 第1調查區土壤斷面圖 (S=1/40)

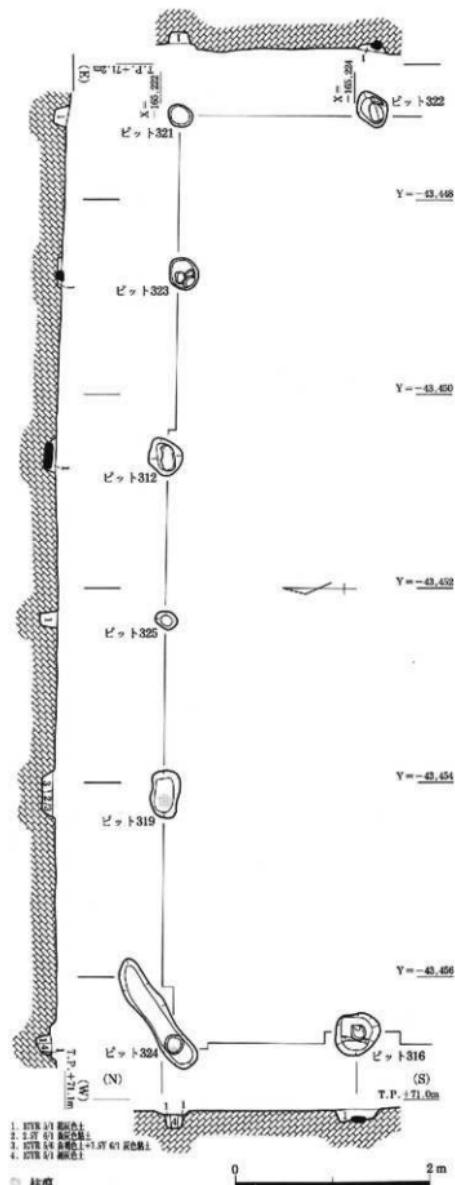
掘立柱建物345（第8図）

E5-7-C15-c5・c6で検出した建物である。付近は削平が著しいため、柱穴の深さはわずか5cm程度しか残っていないものが多い。

建物の南半部は調査区外に伸びており全体はわからないが、現状では桁行5間、梁間2間以上の東西棟とみられる。主軸の方向はN-92度-Wである。桁行の柱間寸法は1.7~1.8mで、西端部のピット319と324の間のみが2.55mと広い。この数値から1.7mを引くと残りは0.85mとなり、他の柱間寸法のちょうど半分となることから、両ピット間に削平されたピットが存在し、端部の0.85m分は底であった可能性が考えられる。梁間の柱間寸法は2.0mである。

柱穴は削平されているために本来の規模はわからない。平面形もいびつなものが目立つ。また柱穴には根石を置くものが4基あるが、根石の石材は近辺の谷筋で一般的に見られるチャート（ピット316・322）と礫岩（ピット312・323）に限られている。

なお柱穴から出土した遺物は少なく、中世の瓦器椀（ピット312）と土師器小皿（ピット370）だけであり、ともに小片であった。ただ中世遺物包含層の出土遺物を考え合わせると、本掘立柱建物の時期は鎌倉時代前半（13世紀前葉）頃に比定するのが妥当であろう。



第8図 掘立柱建物345平面・断面図 (S=1/50)

土坑280（第9～11図）

E5-7-C14-c6で検出した土坑である。南端を側溝で切ってしまったため平面形と正確な規模は不明であるが、側溝南側の断面には本土坑が認められないことから、規模は東西1.28m、南北1.3m前後であったと推測される。深さは最大0.3mである。

本土坑からは瓦および瓦器、土師器が出土した。遺物はいずれも最下層であるN6/0灰色粘土層上面には接する形か、あるいは中層の7.5YR6/1褐色粘質土下半から出土した。多くが重なるように出土しており、一括して投棄されたものと考えられる。

瓦には軒平瓦と平瓦がある。このうち軒平瓦は唐草文軒平瓦（8）1点のみである。焼成は軟質で、表面の摩滅が著しい。頭の形態は破損のため不明だが、直線的に平瓦部につながるようである。時期は平安時代中期

から後期（10～11世紀代）

と考えられる。一方、平瓦

（9～12）は鎌倉時代のも

のであろう。土器には瓦器

椀、同小皿、土師器羽釜、

同小皿がある。このうち瓦

器椀（1）は完形である。

尾上編年のIII-2期であり、

鎌倉時代初頭（12世紀末～

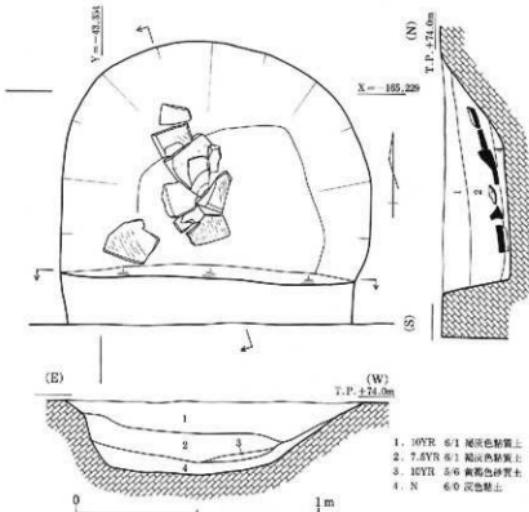
13世紀初頭）に比定される。

その他の土器は破片だが、

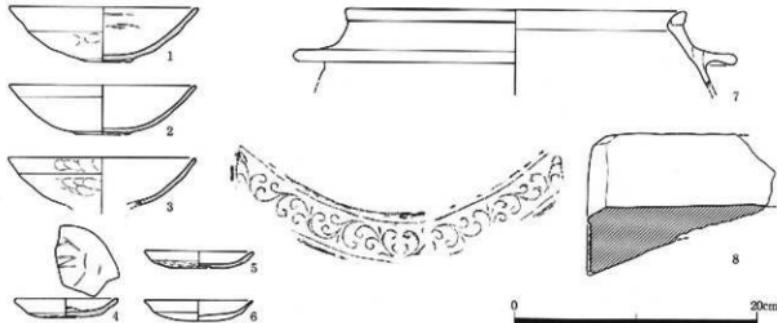
ほぼ同時期であり、本遺構

の時期とみなしてよいと考

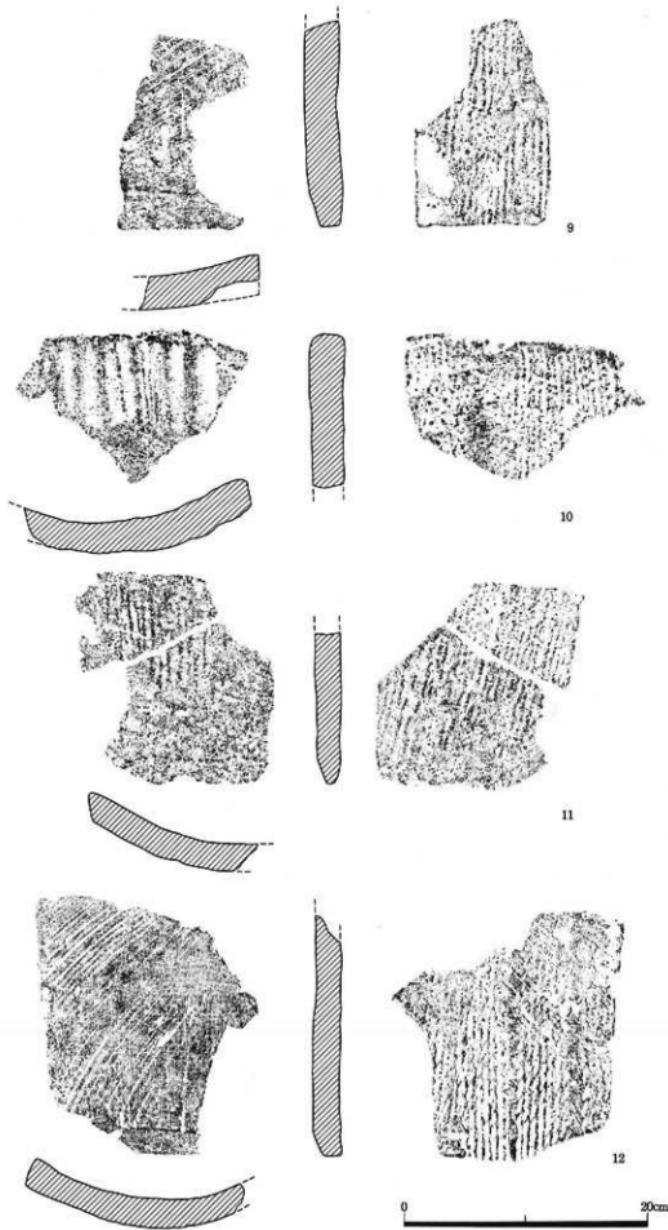
える。



第9図 土坑280平面・断面図 (S=1/20)



第10図 土坑280出土遺物 (1) (S=1/4)



第11図 土坑280出土遺物(2) (S=1/4)

土坑302（第12図）

E5-7-C15-c4で検出した土坑である。全体を検出できなかったが、現状の規模は長さ1.98m、検出幅0.66m、深さは0.16mである。遺物は須恵器坏身が2個体（13・14）と須恵器壺等の小片が出土した。（13）はほぼ完形である。陶邑IV-4に比定される。本遺構の時期は奈良時代末（8世紀末）と考えられる。

近世耕作土出土遺物（第13図）

近世耕作土からは古墳時代後期～奈良時代の須恵器と中世の瓦器、土師器が多く出土した。近世の遺物は非常に少ない。

いずれも小片で、図示で

きるものは少ない。（15）

は須恵器壺、（16）は須

恵器坏身、（17）は須恵

質の瓦である。（15）は

小片のため、透かしの位

置と数は推測で補った。

なお図示した3点を含め、

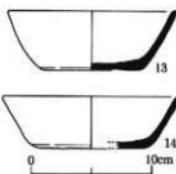
奈良時代の遺物はE5-7

-C15-c6付近から最も

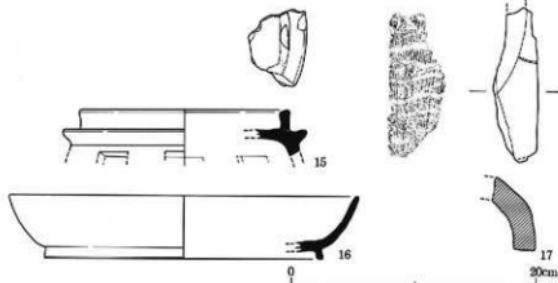
多く出土している。

中世遺物包含層出土遺物（第14図）

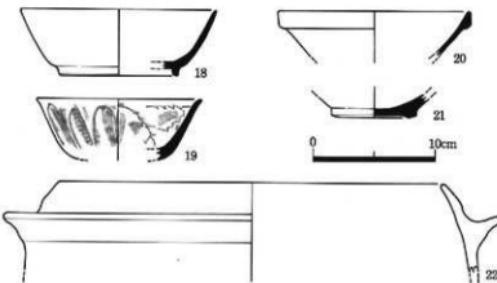
中世遺物包含層から出土した遺物は、古墳時代後期～奈良時代の須恵器と中世の瓦器、土師器、陶磁器を中心とする。（18）は奈良時代の須恵器坏身である。中世の遺物では瓦器壺、同小皿も出土しているが、いずれも小片であった。土師器は羽釜、小皿が多く、（22）の羽釜が比較的残りが良かった。青磁、白磁は掘立柱建物345の位置するE5-7-C15-c5・c6とその周囲から出土した。（19）は龍泉窯系の青磁壺である。高台は残っていない。外面には蓮弁を描き上から柳描文を、内面は劃花文を施す。（20・21）は福建省産の白磁壺である。青磁、白磁の時期は12世紀代に比定される。瓦器壺などの時期と大きな齟齬はきたさないものと考えられる。



第12図 土坑302
出土遺物 (S=1/4)



第13図 第1調査区近世耕作土出土遺物 (S=1/4)



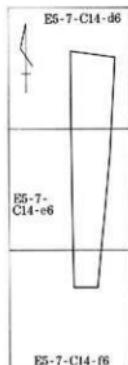
第14図 第1調査区中世遺物包含層出土遺物 (S=1/4)

第2節 第2調査区の調査結果（図版4）

第2調査区は第1調査区の南に位置する調査区である。また平成7年度4b区に隣接する。調査区の大きさは長さ19.5m、幅2.0m～3.5m、面積は53m²である。

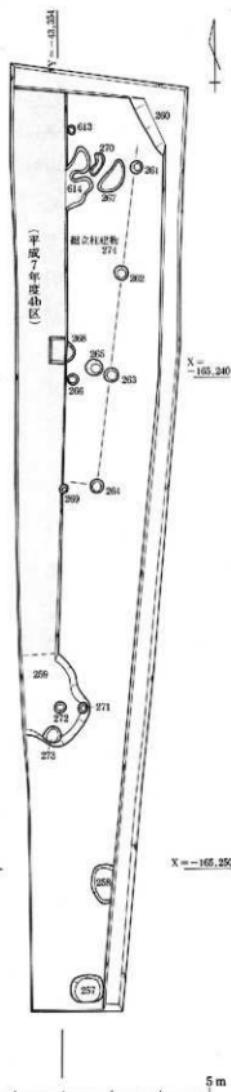
（1）基本層序（第17図）

本調査区は1枚の耕作地の中に収まっているが、最も高い東端部に位置している上、丘陵斜面の傾斜の緩やかな南北方向に設定されたため、現地表面のレベルはT.P.+74.6m前後とほぼ平坦である。そして近世の丘陵開発により、全体が大きく削平されているために、他調査区と異なり近世耕作土およびその造成のための盛土がほとんど認められない。したがって、層序は非常に単純である。



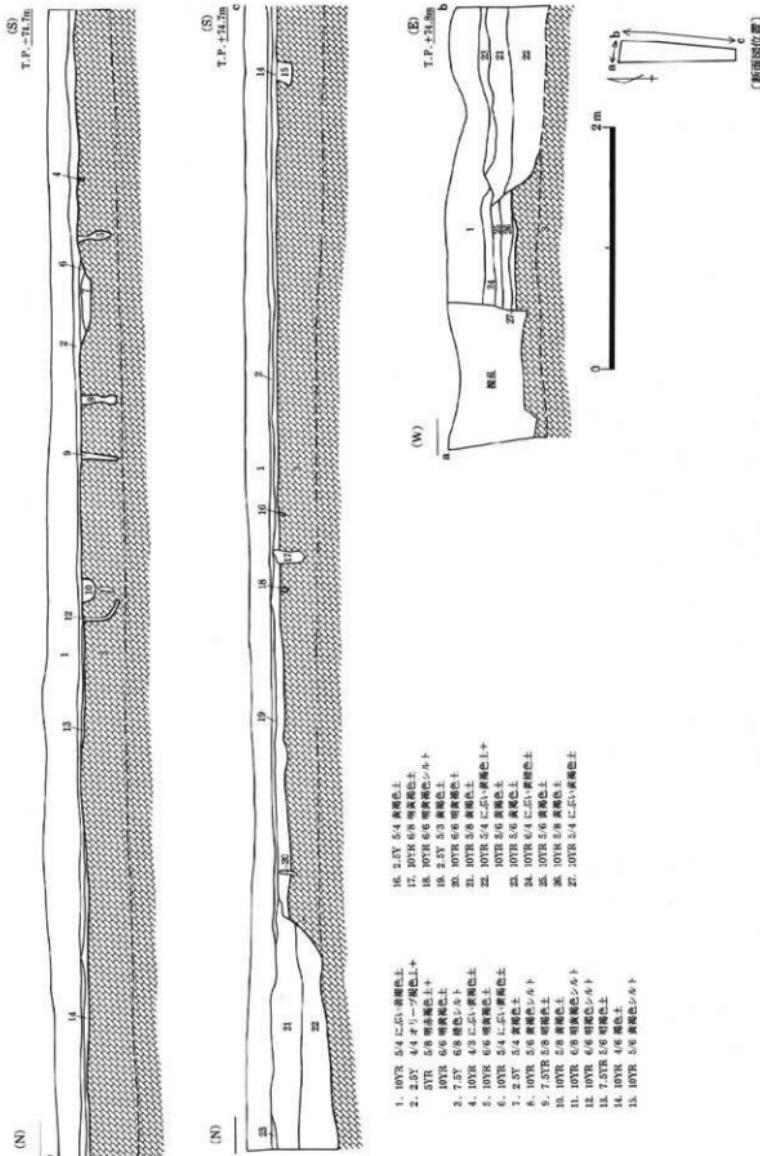
第17図 第2調査区地区割図
(S=1/400)

最上層の耕作土（1）は層厚0.2～0.25mとほぼ調査区全域で均一である。耕作土の下層には2.5Y4/4オリーブ褐色土を主体とする層（2）が調査区全域で認められた。層厚は0.05mと非常に薄い。その下層には中世遺物包含層（4）がある。本層は地山面が丘陵の傾斜につれて低くなる調査区北半部（X=-165,246以北）でのみ確認された。その厚さは最大で0.1mと非常に薄い。確認されなかった調査区南半部では完全に削平されているものと考えられる。本層の下層が地山層（3）である。堅くしまった土層である。本層は全体としては7.5Y6/8橙色シルトが主体であるが、調査区南半部では7.5Y6/8橙色シルトと5YR5/8赤褐色シルトが1cm程度の厚さで交互に重なる互層となっている。こうした互層の様子は北半部では不明瞭であった。本層上面が遺構面である。上面には鉄分・マンガンが沈着しており、特に調査区東端部が著しかった。なお遺構面のレベルはT.P.+74.1～74.25mである。



第16図 第2調査区平面図 (S=1/100)

第17図 第2調査区土層断面図 ($S = 1/40$)



(2) 主な遺構と遺物 (第16図)

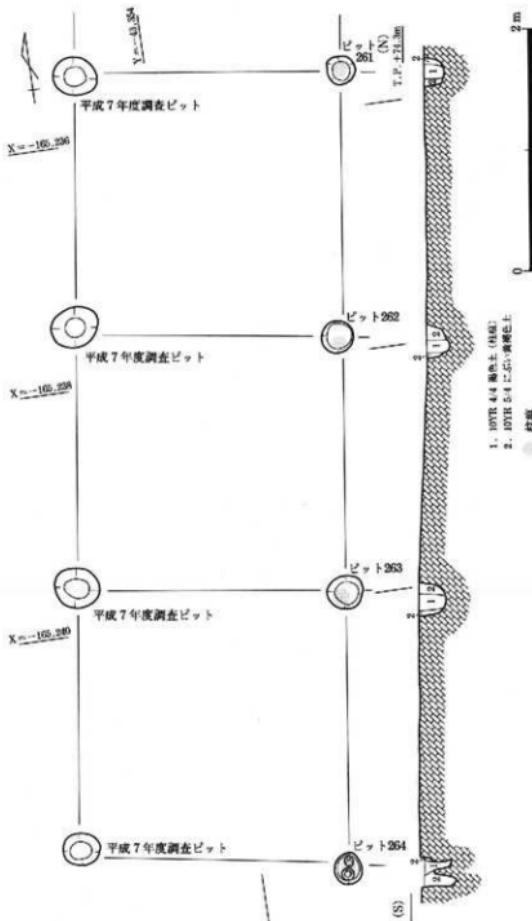
検出された遺構はピット、土坑である。ピットの中には隣接する平成7年度4b区で部分的に検出された掘立柱建物の続きを構成する柱穴が4基含まれている。

土坑260

E5-7-C14-d6で検出した土坑である。調査区北東端部に位置するため一部を検出したにとどまった。平面形は円形と推測される。深さは0.5mである。本遺構は中世遺物包含層上面から掘り込まれており、本調査区では最も時期が下がる遺構である。埋土は大きく上下2層に分かれている。出土遺物は上下層とも変わりがなく、近世の瓦などが出た。本遺構の時期は近世もしくはそれ以降であると考えられる。

掘立柱建物274 (第18図)

E5-7-C14-d6・e6で検出した掘立柱建物である。先述の通り平成7年度4b区で検出された掘立柱建物を構成する柱穴の続きをある。掘立柱建物はまだ調査区外に伸びるが、総柱建物であることが判明し、桁行4間以上、梁間2間以上の南北棟であると考えられる。主軸の方向はN-8度-Wである。柱間寸法は桁行、梁間とも2.2mである。いずれの柱穴からも遺物は出土しなかった。柱間寸法は平成7年度6区、平成8年度第3調査区で検出された12世紀末～13世紀前半の掘立柱建物群と共通しており、同時期のものと見ておきたい。



第18図 掘立柱建物274平面・断面図 (S=1/40)

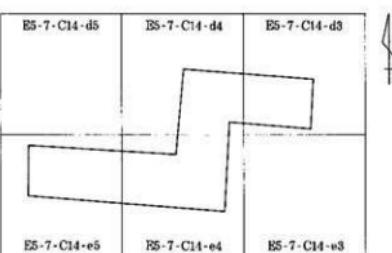
第3節 第3調査区の調査結果（図版5・6）

本調査区は第2調査区の東隣にある、農業用水路を挟んで1段高い耕作地に設定したものである。調査区は民家に沿って屈曲しているが、幅4.0m、総延長は30.0mで、面積は120m²である。

（1）基本層序（第20図）

本調査区は丘陵の斜面に沿って設定されていることから、上方にあたる東端部と下方にあたる西端部では土層の様相が大きく異なる。

最上層は現代の耕作土（1）である。層厚は調査区全域でほぼ0.2mと均一である。この下層は5Y4/1灰色土を主体とする土層（6・14）である。層厚は0.05m前後と薄い。この下層は近世耕作土（7・8・10・15・16）である。本調査区西半部では近世耕作土は何層もの堆積が認められ、盛土を繰り返し行うことで1枚の耕作地を次第に大きくしていった様子が伺える。この中でも本層は大きく2つの段階にわけて捉えることができよう。はじめの段階は（7・8・10）の土層が盛り土された段階である。この段階では本調査区東半部と西半部は0.3mのレベル差があり、大きく2枚の耕作地にわかれていた可能性が高い。次の段階は（15・16）が盛り土された段階で、現在のような1枚の広い耕作地とされたものと考えられる。近世耕作土の下層が中世遺物包含層（17）である。本層は削平のために調査区東半部には認められず、西半部においても層厚は約0.1m程度である。本層の下層が地山層（18）である。本層上面が遺構面である。本遺構面は第21図に示したように、調査区東端部では遺構面のレベルはT.P.+75.25m前後だが、Y=-43.326付近で段がついて以西はT.P.+75.15m、Y=-43.330付近で再び段がついて以西はT.P.+75.05m、Y=-43.336付近で三たび段がついて以西はT.P.+74.7mとなっている。こうした段は平安時代末から中世にかけての丘陵開発の姿を示していると考えている。なお本調査区では鉄分・マンガンの沈着はあまり顕著ではなかった。

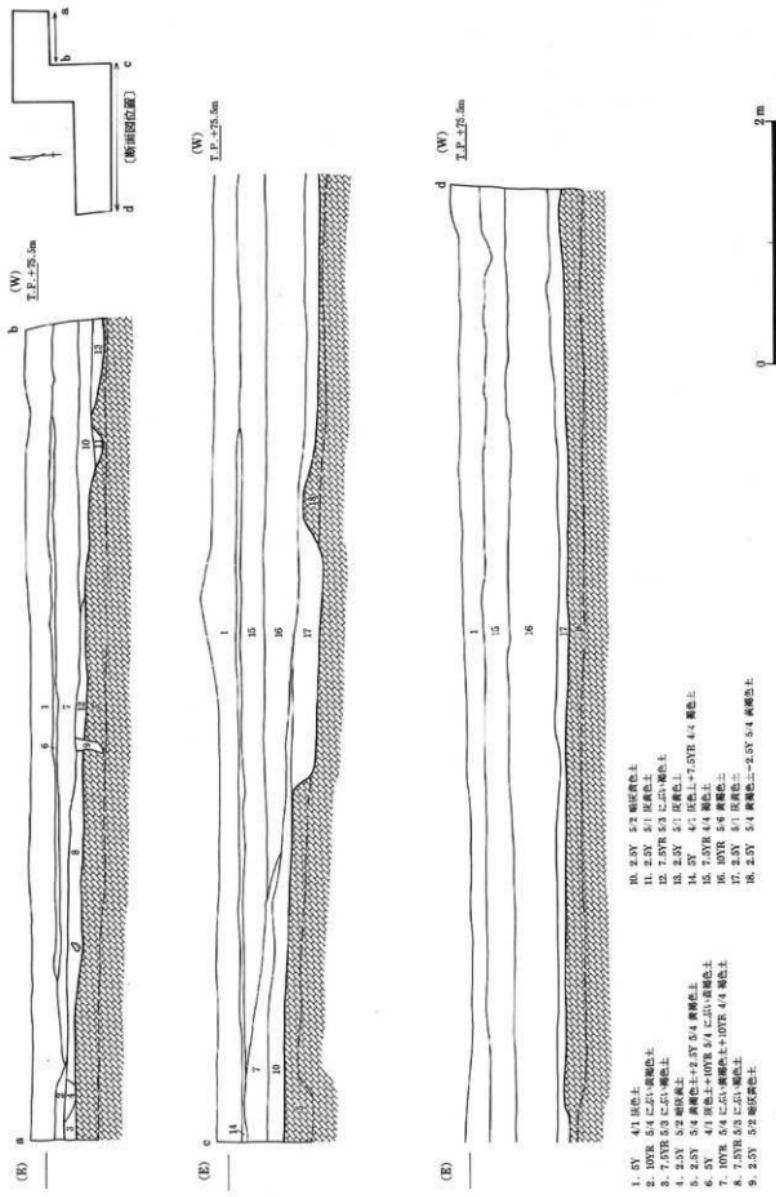


第19図 第3調査区地区割図（S=1/400）

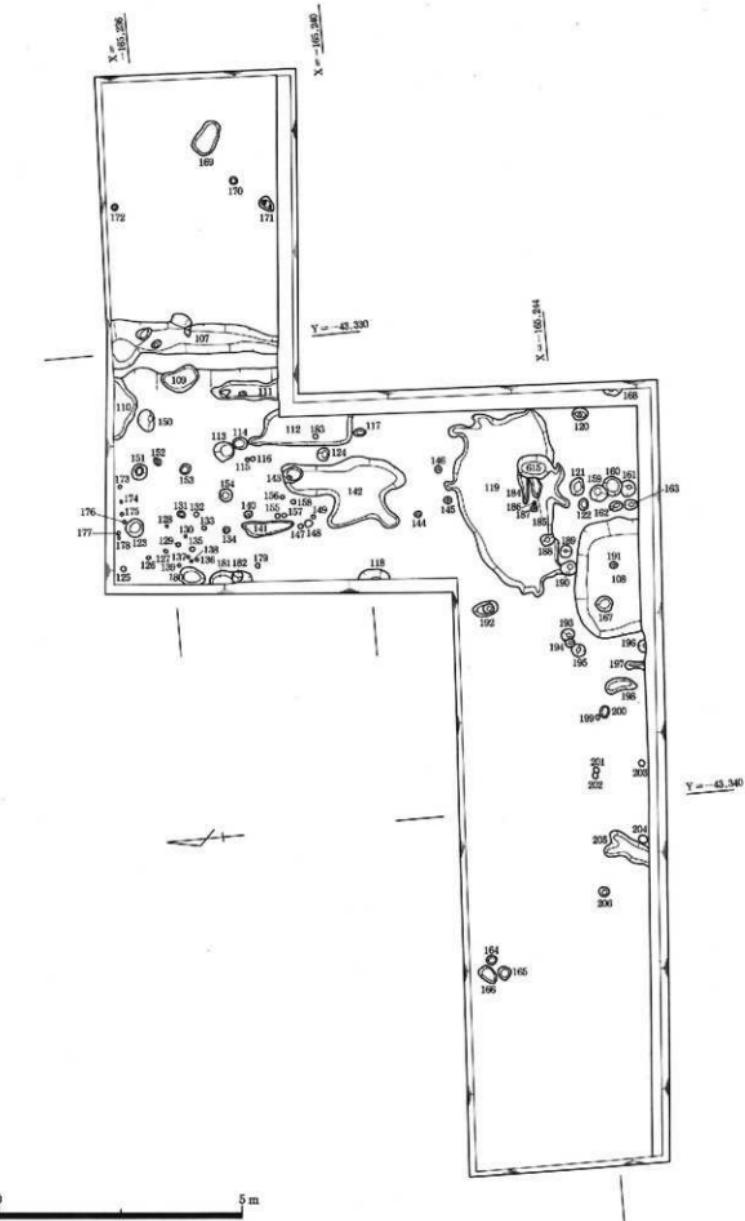
（2）主な遺構と遺物（第21図）

検出された遺構はピット、土坑、溝などである。狭小な調査区の中でも遺構の粗密には地区により大きな差がある。

調査区東端部（E5-7-C15-d3）では、検出した遺構は土坑1基、ピット3基のみであった。いずれの遺構からも遺物は出土せず、その時期を決定するのは困難である。一方、調査区中央部（E5-7-C15-d4・e4）には本調査区で検出した遺構の大半が集中している。このうちE5-7-C15-d4には上面から打ち込まれた杭跡と見られる径0.05~0.1m前後の小規模なピットが多



第20圖 第3調查區土壤斷面圖 (S = 1/40)



第21図 第3調査区平面図 ($S = 1/100$)

く残っているが、これを除けばほぼ全てが中世の遺構であると考えられる。ピットには柱痕の残るものが多く、柱を固定するための跡が認められるものもある。調査区内では建物は復元することはできなかったが、その存在は確実である。調査区西端部(E5-7-C14-e5)では遺構はほとんど検出されなかった。わずかに検出した遺構も他の遺構とは全く埋土が異なっており、樹木などの根跡である可能性がある。

遺構出土遺物（第22図）

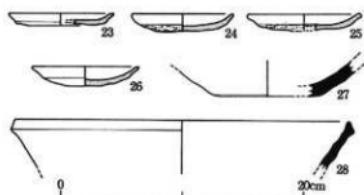
遺物を出土した遺構は少なくないが、その大半が小片であった。(23~26)は瓦器小皿、(27・28)は須恵器練鉢である。(23)はピット138、(24・25)はピット167、(26~28)は土坑119から出土した。いずれも12世紀後半～13世紀前半に比定されるものと考えられる。

近世耕作土出土遺物（第23図）

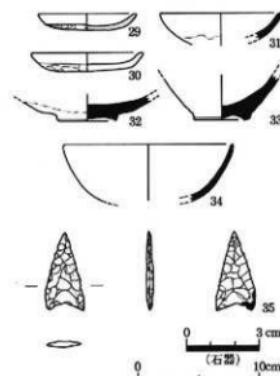
本層は既述の通り数層に大別されるが、それぞれの層から出土する遺物には種類や出土量を含めて大きな差がない。多くは下層の中世遺物包含層に由来する中世の遺物である。瓦器小皿(29)、土師器小皿(30)は16層から出土した。近世耕作土出土遺物の中で完形もしくは完形に近い遺物はこの2点だけである。一方、唐津(31~33)は7層から出土した。中世後期の遺物がほとんど出土していないことを考えると、集落廃絶後しばらく間をあけて近世初頭から丘陵の再開発が行われ始めたことを示す遺物であると考えられる。(34)は近世耕作土の中でも最上層にあたる15層から出土した陶器丸碗である。全体に黄色味がかった胎土で、器壁は薄く、釉には細かな貫入がはいる。京焼系かと考えられるが、産地は不明である。

中世遺物包含層出土遺物（第24図）

中世遺物包含層からは瓦器碗、瓦器小皿、土師器羽釜、土師器小皿、古墳時代の須恵器などが出土したが、いずれも小片である。瓦器碗は外面にミガキを施さない尾上編年のⅢ期に比定されるものが大半を占める。杭跡を除く遺構の時期は平安時代末～鎌倉時代前半（12世紀後半～13世紀前半）と推測される。なお図示した(36)は灰釉の薄くかかった陶器である。壺の底部近くの破片であると考えられる。胎土の特徴から古瀬戸の可能性が高いと考えられる。



第22図 第3調査区遺構出土遺物 (S=1/4)



第23図 第3調査区近世耕作土出土遺物 (S=1/2、1/4)



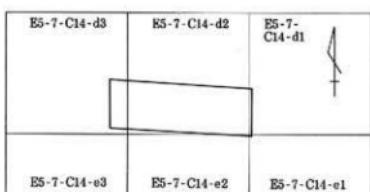
第24図 第3調査区中世遺物包含層出土遺物 (S=1/4)

第4節 第4調査区の調査結果（図版7・8）

本調査区は第3調査区東隣に設定した調査区である。調査区の大きさは長さ11.5m、幅は4.0mで、面積は46m²である。

第3～5調査区は既往の調査を含めて最も高い位置にあたり、土層に関するデータは少なかった。基本的な層序は大きく変わらない

とは考えられたが、近世耕作土と考えられた

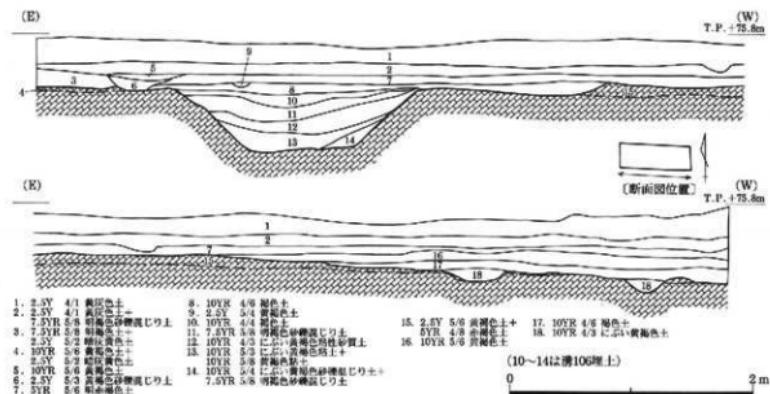


第25図 第4調査区地区割図 (S=1/400)

土層が実際に近世の耕作土であるのかどうかを確認する必要があると考えたため、第3～5調査区の中でも最も高い位置にあり、それらの調査区の中で最初に調査に取りかかった本調査区において「近世耕作土」上面でも遺構の検出を試みて、遺構等の有無を確認した。結果として近世の耕作土であることは間違いない事を確認したため、続いて実施した第3・5調査区の調査では近世耕作土上面の調査は行わなかった。

（1）基本層序（第26図）

最上層は現代の耕作土（1）である。層厚は調査区全域でほぼ0.15～0.2mと均一である。この下層には床土（2）がある。層厚は0.1m程度である。床土の下層は近世耕作土（3・7）である。本層上面が第1遺構面である。第1遺構面のレベルはT.P.+75.75～75.85mである。近世耕作土の下層が中世遺物包含層（16・17）である。本調査区では中世遺物包含層は2層認められた。中世遺物包含層調査区東半部では削平されているが、西半部においても層厚はそれぞれ最大0.1m程度である。なお念のため17層上面で精査し、遺構の検出を試みたが、遺構は認められなかった。この下層が地山層（4・15）であり、本層上面が第2遺構面である。第2遺構面のレ



第26図 第4調査区南壁土層断面図 (S=1/40)

ベルはT.P.+75.6~75.8mである。なお調査区東半部では鉄分・マンガンの沈着が著しかったが、西半部は地山の土質が砂質となり、鉄分・マンガンの沈着はほとんど認められない。

(2) 主な遺構と遺物 (第27図)

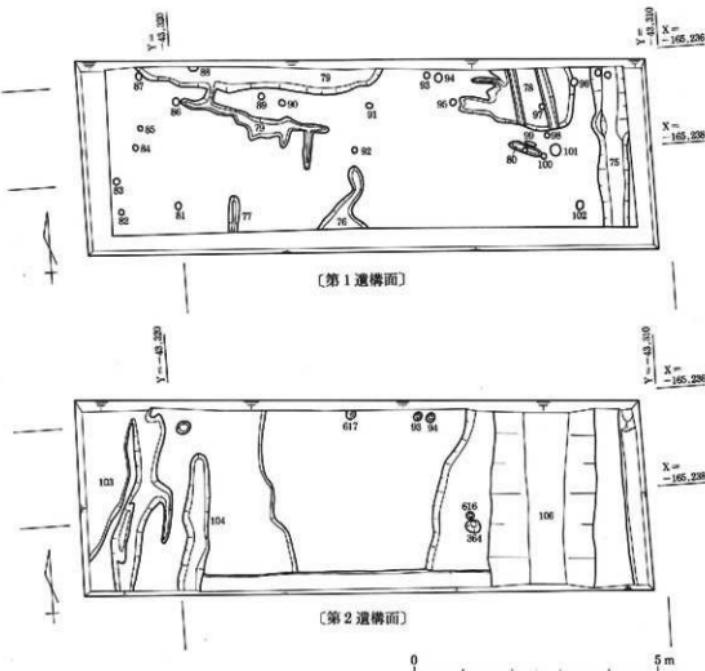
第1 遺構面

本遺構面ではピット、溝、不定形の土坑を検出した。ピットは大半が径0.1m程度の小さなものである。重機により本面直上まで掘削しているため断定はできないが、上層から打ち込まれている可能性が高く、おそらく近代以降の杭跡であろう。溝は調査区東端部を南北に通る溝75が耕作地の用水路と考えられるが、その他の小溝や不定形の深い土坑は鋤溝と鍬溝がいくつか重なったものと考えられる。

本遺構面の時期は近世であると考えられる。

溝75

E5-7-C14-d2で検出した溝である。調査区をほぼ南北に通る。規模は幅0.6m、深さ0.2mである。遺物は古墳時代の須恵器片が少量出土した。近世耕作土上面から掘り込まれており、埋



第27図 第4調査区第1・2遺構面平面図 (S=1/100)

土には砂礫を多く含むことから、近世の用水路であった可能性が高い。

第2遺構面

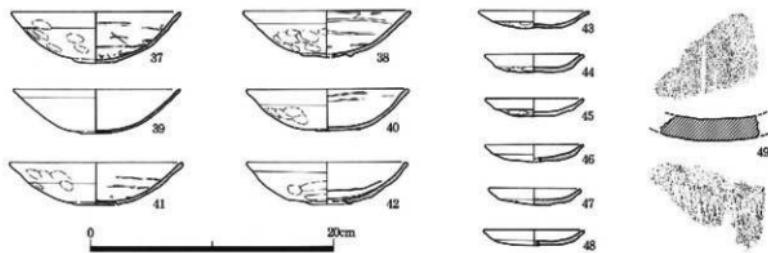
本遺構面では溝およびピットを検出した。大溝（溝106）は調査区東端部で、不定形の溝状遺構は調査区西端部で検出した。調査区中央部には遺構は認められない。ピットは溝106の肩に2基（ピット364・616）検出された。このうちピット364には柱痕が認められたが、これに対応するピットは他に認められなかった。不定形の溝状遺構はあるいは耕作に伴う鋤溝などである可能性も考えられる。ただ隣接する第3調査区東端部は削平を受けているため、こうした遺構は認められず、現状では範囲が非常に限られているため断定はできない。

本遺構面の時期は溝106出土遺物から鎌倉時代前半（13世紀前半）であると考えられる。

溝106（第28図）

E5-7-C14-d2で検出した溝である。幅2.2~2.3m、深さ0.6m、調査区を南北に通る大溝である。埋土は粘土および粘質土・シルトが主であり、滲水あるいはきわめて緩やかな流れであったものと考えられる。位置から考えて第5調査区南側の谷筋から取水した可能性が高い。規模や堆積状態から考えると屋敷地を巡る堀であった可能性も考えられる。

遺物は瓦器椀（37~42）、瓦器小皿（43~48）、土師器小皿、平瓦（49）などが出土した。多くが最下層から出土している上、完形に近いものが多く一括性は高いと考えられる。瓦器椀（37~42）は外面にミガキがなく、高台は低い台形あるいは半円形に近い。尾上編年のIII-3期であり、鎌倉時代前半（13世紀前半）に比定される。



第28図 溝106出土遺物 (S=1/4)

近世耕作土出土遺物（第29図）

近世耕作土から出土した遺物は少ない。古墳時代の須恵器、中世の土師器、瓦器、青磁の他、近世の唐津、伊万里がある。すべて小片であり、完形もしくは完形に近いものはなかった。このうち図示したのは青磁（50）のみである。龍泉 第29図 第4調査区近世盛土出土土器 (S=1/4)



第5節 第5調査区の調査結果（図版9・10）

第5調査区は直角に屈曲したL

字形をしている。調査区の幅は1.5~4.0m、総延長は65.0mで、面積は212m²である。

（1）基本層序（第31図）

最上層は耕作土（1・27・35）、

その下層は床土（2・30）である。

床土の下層が近世耕作土（13・14・

28・32）、近世耕作土の下層には

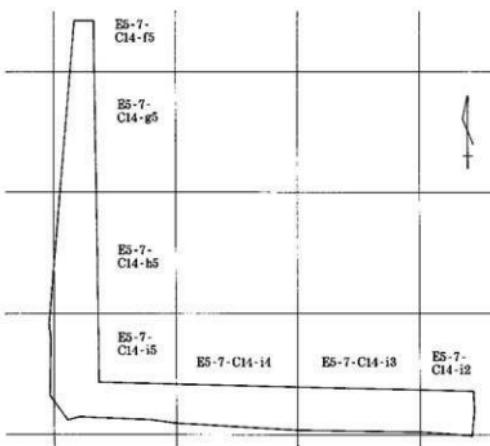
中世遺物包含層（29）がある。図

示した範囲では地山の凹凸のため

にわかりにくいが、E5-7-C14

-f5・g5・h5では、近世耕作土

と中世遺物包含層の様相は第3調



第30図 第5調査区地区割図 (S=1/400)

査区と全く共通する。本層の下層は地山（20）であり、地山層上面が遺構面である。なお遺構面のレベルはT.P.+74.7~75.9mである。

（2）主な遺構と遺物（第31図）

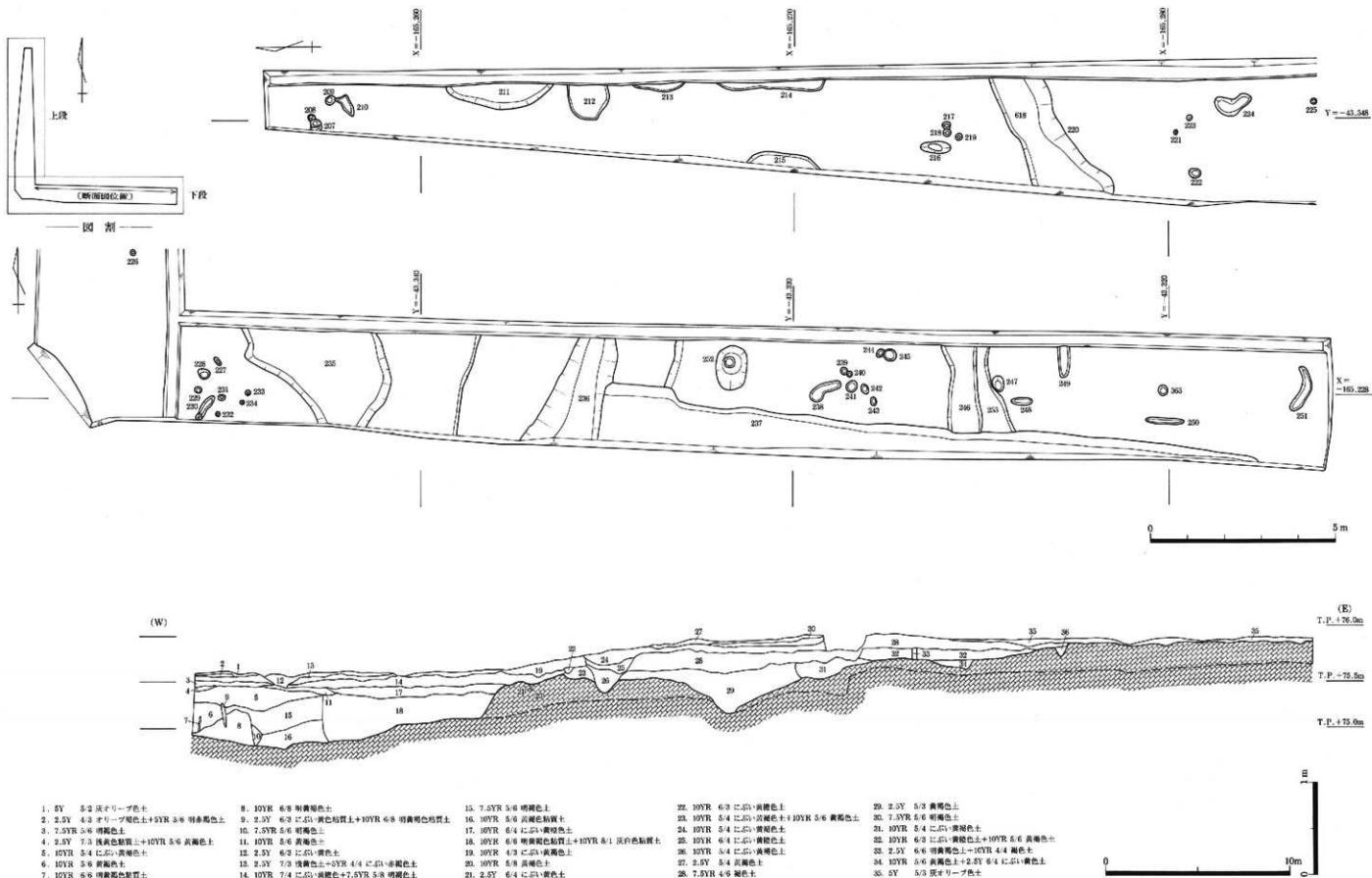
本調査区ではピット、土坑、溝、落ち込み、谷を検出したが、大半の遺構からは遺物が出土せず、時期と性格は不明なものが多い。E5-7-C14-i3で検出したピット（244・245・247・363）には柱痕が確認されたが、建物は復元できなかった。またE5-7-C14-i4・i5で検出した不定形の落ち込みは谷筋に近いものもあり、自然地形と思われる。E5-7-C14-h5では段と用水路と考えられる溝を検出した。谷はE5-7-C14-i2~i4で肩の一部を検出している。

段220・溝618

E5-7-C14-h5で検出した段差と段の下を北東一南西方向に流れる溝である。段差は0.8mあり、耕作地の段である可能性が高い。溝の規模は幅1.2~1.5m、深さ0.05mである。溝の埋土は中世遺物包含層であることから、本遺構の時期は中世に遡るものと考えられるが、付近では掘立柱建物群が検出されており、その廃絶後に耕作地が開発されたものと推測される。

谷237

E5-7-C14-i2~i4で検出した東西方向の谷である。溝236に切られているが、ここで南西方向に向きを変え、第6調査区谷254につながると考えられる。遺物は非常に少ないが、中世の瓦器、土師器、古墳時代～奈良時代の須恵器片等が出土した。

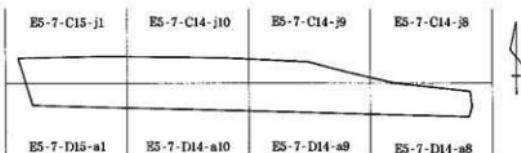


第31図 第5調査区平面図 (S=1/100)・土層断面図 (縦S=1/40、横S=1/100)

第6節 第6調査区の調査結果（図版11）

第6調査区は「新池」の東に隣接する耕作地に位置している。新池は現在の地形図をみても明らかに谷筋にあたり、堤を築くことによってこれをせき止め造られた溜め池である。本調査区の位置する耕作地は狭い急流性の谷が丘陵西側斜面に向かって大きく開く、まさにその地点にあたる。この谷は本調査区の東、丘陵頂部にある大規模な開析谷から派生している。開析谷は現在いくつかの池として残っているが、ここには須恵器窯跡が存在していることから、その支谷にあたる本調査区付近にも多数の遺物が流されてきていることが十分に予想された。また、谷が埋没し、本地が耕作地化された時期を確認するために、床土の下層においても遺構の検出を試みる必要があると考えた。

なお本調査区は長さ37.0m、幅2.1~4.2m、面積は134m²である。



（1）基本層序（第33図）

第32図 第6調査区地区割図（S=1/400）

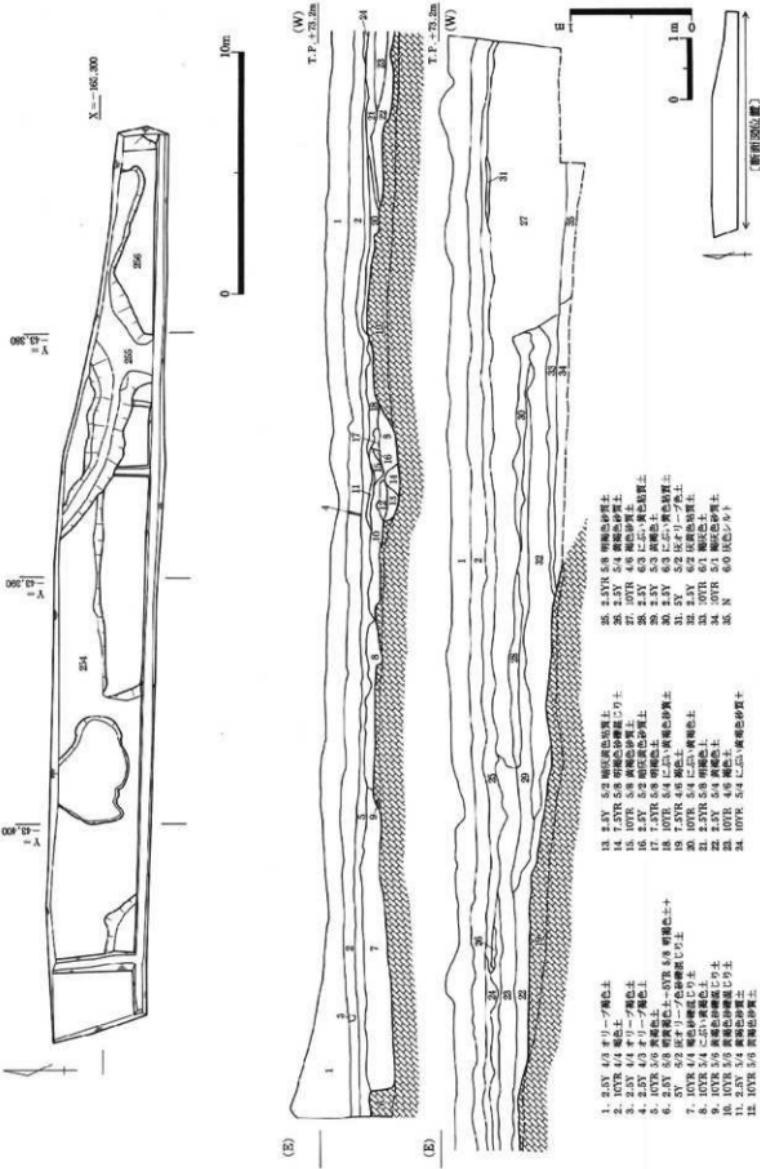
最上層は現代の耕作土（1）である。層厚は0.2mとほぼ均一である。その下層は床土（2）である。上面付近は鉄分・マンガンが沈着し、褐色を呈している。層厚は0.1~0.15mである。その下層は近代以前の耕作土（5・25）である。層厚は0.5~0.1mと薄い。本層上面が第1遺構面である。第1遺構面のレベルはT.P.+73.8~73.9mである。本層より下層は砂礫、砂質土を主体とする谷の埋積土である。地山（6・9・10・19）はやはり谷埋積土であるが、上層の砂礫、砂質土と異なり非常にかたくしまっており、また本層より下層は全く遺物を含まないことから、谷埋積土の中でもこれらの層上面をもって地山面とした。地山面は西に行くほど下がっていくが、全体的に傾斜は緩やかである。ところがY=-43,400から西側は地山面が急に低くなっていく。しかしT.P.+72.0m近くまで下げた時点で隣接する新池の水面よりもかなり低くなつたために調査区への浸水が著しくなり、それ以上の掘削は断念せざるをえなかった。第2遺構面のレベルはT.P.+72.0m（確認した下限）~72.75mである。

（2）主な遺構と遺物（第33図）

第1遺構面

本遺構面では多数の鋤溝を検出した。鋤溝の方向は大半が東西方向である。鋤溝の埋土からは古墳時代後期の須恵器小片を中心とし、中世の土師器小片、近世の伊万里小片などが出土している。また本遺構面のベース土である10YR5/6黄褐色土、2.5YR5/8明褐色砂質土からも古墳時代後期の須恵器および中世および近世の土器、陶磁器の小片等が出土した。

本遺構面の鋤溝および遺構面ベース土出土遺物の中で最も時期が下るのは近世の陶磁器片である。近代以降の遺物は全く出土していないことから考えると本遺構面の時期が近代まで下がるこ



第33図 第6調査区第2邊縁面平面図 (S=1/200)・土層断面図 (縦 S=1/40、横 S=1/80)

とはないと考えられる。ただ、出土した陶磁器のうち時期が明確に判断できるものはいずれも近世後期である。一方、谷埋土最上層からも近世後期の陶磁器片が出土していることから、谷が完全に埋没したのは近世後期であり、この段階で本地の耕地化が実現されたものと考えられる。丘陵の開発のなかでも、谷筋の開発が遅れた状況を示しているものと考えている。

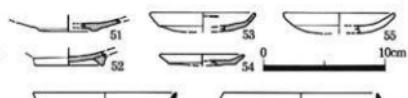
第2 遺構面

本遺構面では谷を検出した。それぞれの切り合いから谷254としたものがもっとも新しく、次に谷256、もっとも古いのが谷255であることが判明している。

谷254（第34図）

調査区の東端部E5-7-D14-a8を除く全体が谷254である。遺物は古墳時代後期～奈良時代の須恵器と中世の瓦器、土師器が中心であるが、大半が小片であった。図示したものは中世の瓦器碗（51・52）、同小皿（53・54）、土師器小皿（55）、奈良時代の須恵器坏身（56）、古墳時代後期の須恵器坏身（57）である。しかし少量ながら

近世後期の伊万里小片も出土していることから、
本谷が埋没した時期は近世後期まで下がるもの
と考えられる。



谷255（第35図）

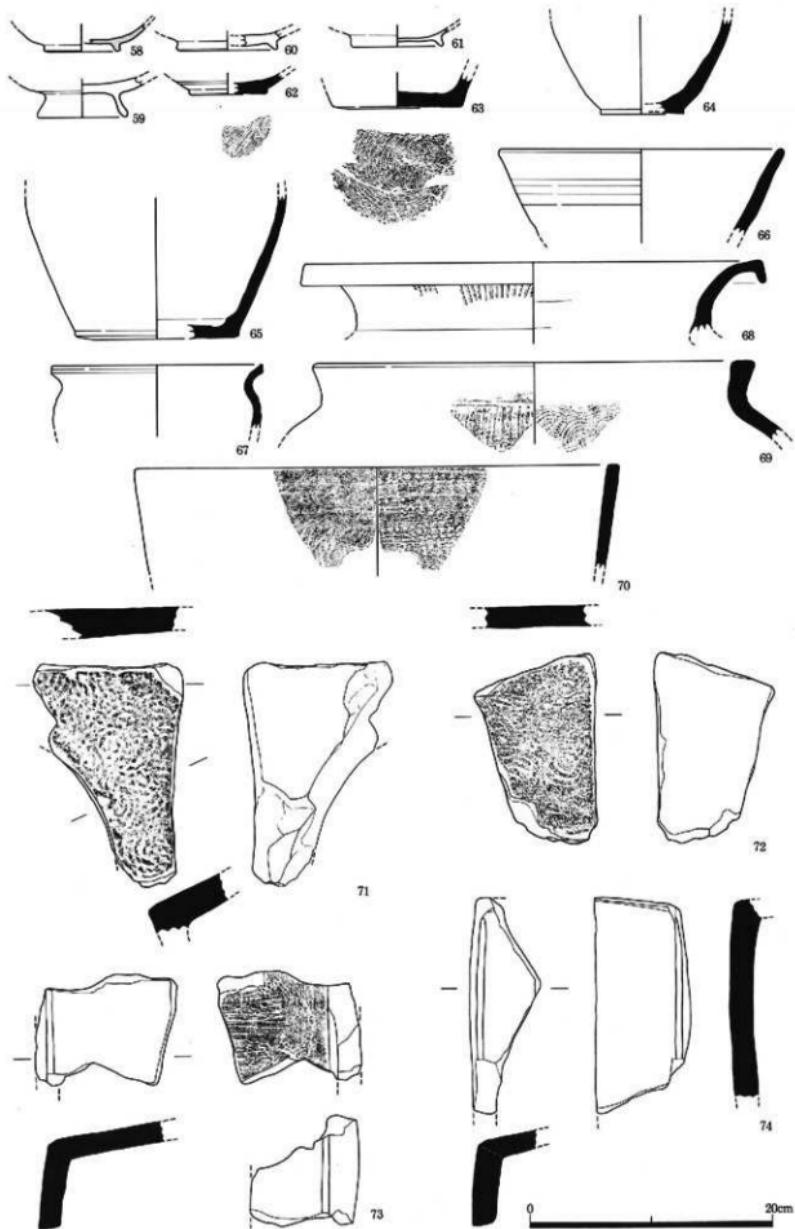
調査区東半部E5-7-C14-j9、E5-7-D14-a8、a9で検出した。幅0.5~1.5m、深さは最大0.6mである。方向は東から北西に向かい、緩やかにカーブしている。古墳時代後期～奈良時代の須恵器と中世の瓦器、陶磁器などが多く出土した。図示した遺物は瓦器碗（58）、平安時代後期～鎌倉時代にかけての土師器坏・碗（59~61）、常滑壺（65）、平安時代中期～後期の須恵器坏（62）・壺（63）・こね鉢（66）、奈良時代～平安時代前期にかけての須恵器壺（67）・壺（68・69）・瓶（70）、そして不明須恵器片（71~74）である。不明須恵器片は内面には同心円タキ、外面はナデもしくは粗いハケメを施すものが多い。胸棺あるいは瓦塔かと思われるが、接合できる破片がほとんどなく、推測にすぎない。

出土遺物のうち古墳時代後期～奈良時代の須恵器に関しては溶着した須恵器、窯壁片も出土していることから、谷上流で検出、あるいは想定されている窯跡との関連が考えられる。なお最も時期が下がる遺物は13世紀前半の瓦器碗である。本遺構の時期は当該期を上限とするものと考えられる。

谷256

調査区東端部E5-7-D14-a8で検出した。一部を検出したにすぎないため、規模、方向は不明である。遺物は中世の瓦器碗、土師器小皿、古墳時代後期の須恵器片が出土した。

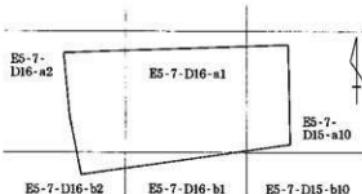
本遺構の時期は中世であるが、切り合いから谷255よりは下がることは確実である。



第35図 谷255出土遺物 ($S = 1/4$)

第7節 第7調査区の調査結果（図版12・13）

第7調査区は新池を挟んで第6調査区の延長線上に設定され、今回の調査区の中では最も西に位置する。調査区は、調査区の南30mに存在する谷に向かって地形が緩やかに落ち始める地点に当たる。調査区は長さ18.5m、幅8.3~10.0m、面積は164m²である。



第36図 第7調査区地区割図 (S=1/400)

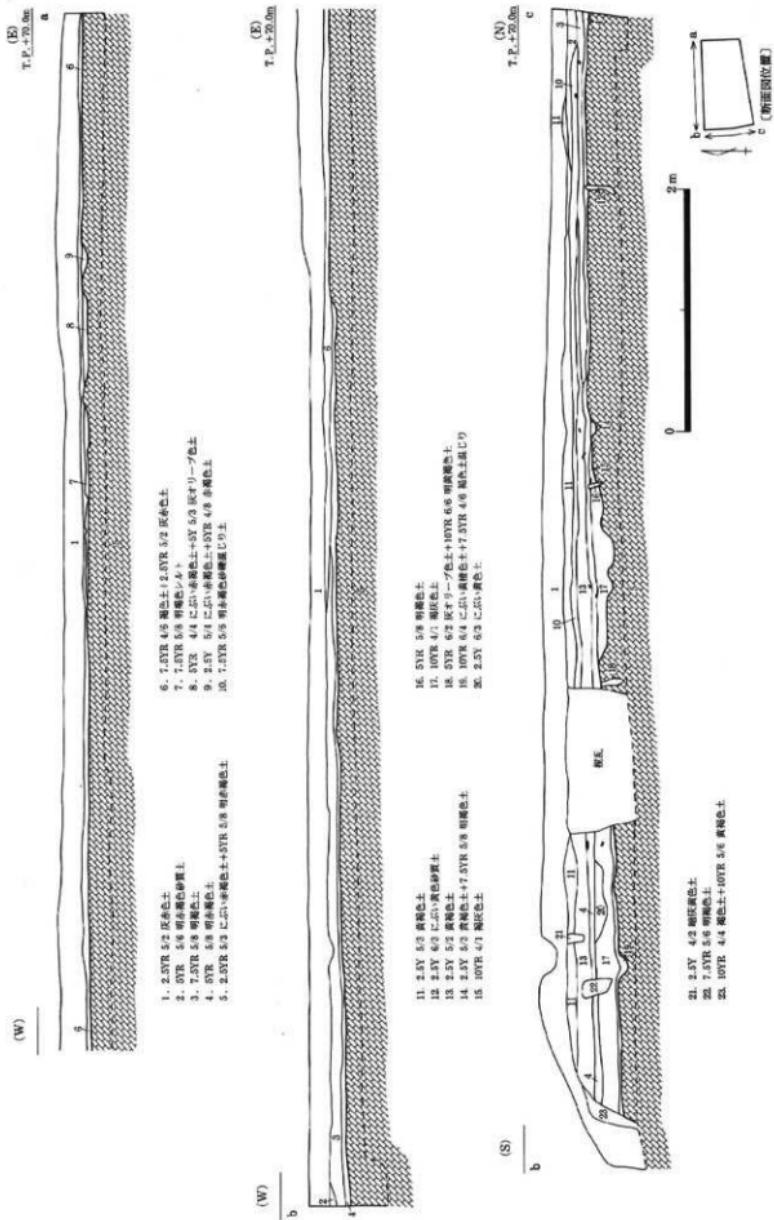
（1）基本層序（第37図）

本調査区は著しく削平を受けている。近世の盛土・耕作土や中世遺物包含層は調査区東半部ではほとんど削平されており、わずかに谷に向かって地形が低くなり始める調査区南西隅周辺において認められたにすぎない。

最上層は現代の耕作土（1）である。層厚は0.2mと調査区全域でほぼ均一である。その下層には床土（2・6・11）がある。層上面および層中に鉄分・マンガンが著しく沈着している。層厚は0.05~0.1mと薄い。床土の下層には調査区北東部ではすぐ地山が現れるが、南西部には西側土層断面（第39図下段a-c）をみてもわかるように、近世耕作土（4・10・13）が削平を免れ残っている。このうち（13）上面で精査を試みたが、鋤溝など耕作に伴う遺構は検出できなかった。ただ地山面上に鋤溝が残っている部分もあることから考えると、（13）上面で耕作の痕跡が検出されないのは削平の影響が大きいと思われる。近世耕作土の下層は中世遺物包含層（17・19）である。中世遺物包含層はが残っている範囲は調査区南西隅部のみと非常に限られていた。その下層は地山（5）であり、地山上面が遺構面である。遺構面のレベルはT.P.+69.2~69.6mである。上面は鉄分・マンガンの沈着が著しかった。

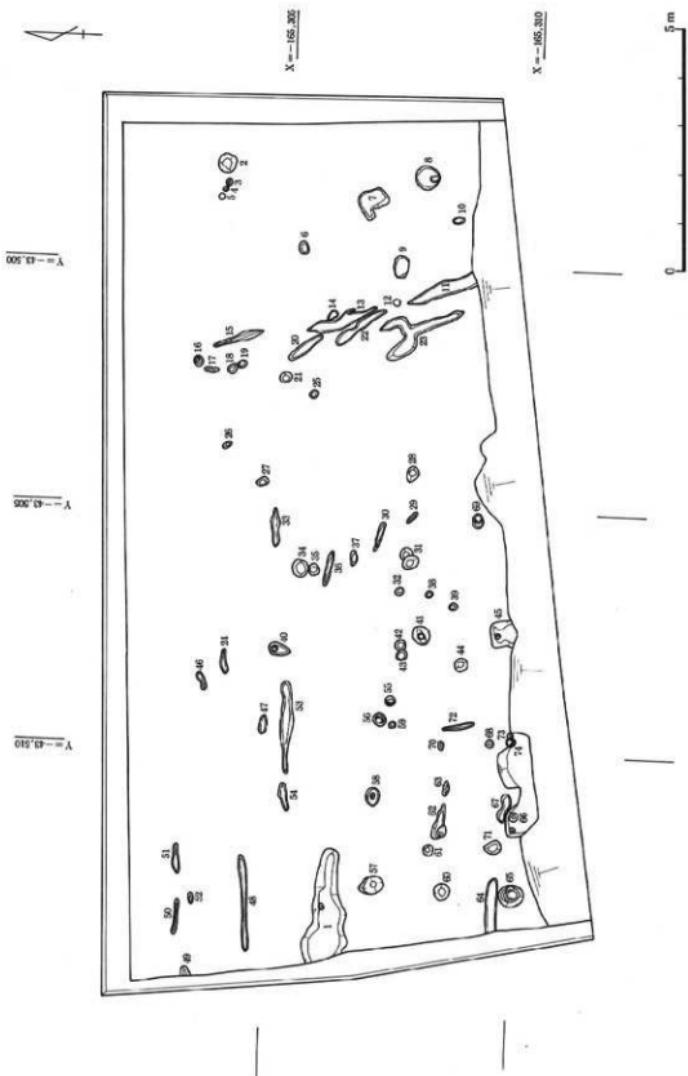
（2）遺構と遺物（第38図）

検出した遺構は溝、ピットがある。溝の大半を占めるのは鋤溝である。調査区の南西隅部を除いてほぼ全面で検出した。明確なものには溝11・13・15・20・22・23・24・30・33・36・46・47・50・51・53・54があるが、その周囲の非常に浅いピットなども鋤溝の痕跡であると考えられる。調査区東半部のものは南北方向、西半部のものはいずれも東西方向である。深さはいずれも0.05m程度である。削平を受けている上に、遺物も少なく、鋤溝の時期ははっきりわからないが、近世であると考えている。ピットは調査区全面で検出したが、特に中世遺物包含層が遺存していた調査区南西部に多い。このうちピット45・56・57・58・60・65・66・73は並びが良く、掘立柱建物を構成するかに見える。その場合、2間3間の東西建物が復元され、桁行5.2m（柱間寸法約1.7m）、梁間2.8m（柱間寸法1.4m）、面積は14.6m²程度であると考えられる。ただし、この案では東北部の柱が2本欠けている。遺存するいずれのピットも直径0.3~0.5m、深さ0.25~0.5



第37図 第7調査区土層断面図 (S = 1/40)

第38図 第7調査区平面図 ($S = 1/100$)



mと本調査区の中では特にしっかりしたもので、後世の耕地化によっても完全に削平されるとは考え難い。この事実は、これらピット群を掘立柱建物として復元することの妥当性そのものを否定すると考えられることから、ここでは掘立柱建物としては扱わないこととする。なお調査区東半部のピットは削平のために、次に述べるピット9以外は深さ0.05m程度しか残っていない。

ピット9（第39・40図）

E5-7-D16-a1・E5-7-D15-a10で検出したピットである。平面形は不整な隅丸長方形で、長径0.58m、短径0.37m、深さは0.12mである。埋土は10YR5/1褐灰色砂質土である。ピット内部には飛鳥～奈良時代の須恵器瓶の破片が折り重なって出土した。破片はいずれも内面を上にして出土している。

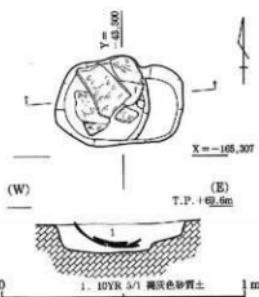
本遺構は飛鳥～奈良時代の須恵器瓶を出土しているが、①本遺構の周辺は著しく削平を受けしており、確実に中世以前に遡ると考えられる遺構はない、②本遺構の西0.5mで検出したピット12は本遺構と埋土が同じだが、中世の瓦器椀、土師器羽釜などの破片が出土している、の理由から遺構の時期は中世もしくはそれ以降に下がる可能性が高いと考えられる。

中世遺物包含層出土遺物（第41図）

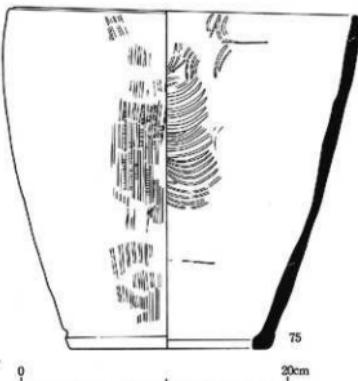
中世遺物包含層からは古墳時代後期～奈良時代の須恵器、中世の土師器、瓦器などが出土した。しかし遺物の出土量は少なく、いずれも小片である。ここでは図化した奈良時代の須恵器蓋（76）、坏蓋（77）、坏身（78）、および砥石（79）を示しておく。

近世耕作土出土遺物

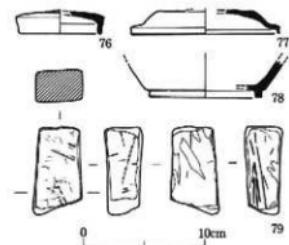
近世耕作土から出土した遺物は古墳時代後期～奈良時代の須恵器、中世の瓦器等であった。いずれも小片のため図示できない。



第39図 ピット9平面・断面図 (S=1/20)



第40図 土坑9出土遺物 (S=1/4)



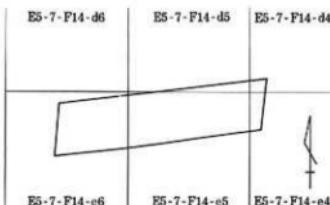
第41図 第7調査区中世遺物包含層出土遺物 (S=1/4)

第8節 第8調査区の調査結果（図版14）

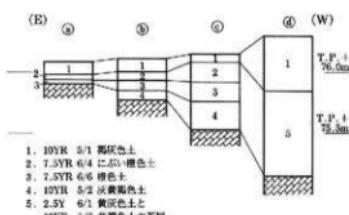
本調査区は今年度調査区の中では最も南に位置している。平成10年度に調査を実施した4区の東につながる。調査区の大きさは長さ17.0m、幅は4.0～4.2mで、面積は71m²である。

（1）基本層序（第43図）

本調査区は現道路部分のため耕作土はない。最上層（1）とその下層（2）は客土である。その下層には近世耕作土（3・4）がある。また（5）は調査区西端部のみで検出した。2.5Y6/1黄灰色土と10YR5/6黄褐色土が0.05～0.1m単位で互層となっている。地山は10YR6/6明黄褐色土である。本層上面が遺構面である。遺構面のレベルはT.P.+75.2～75.9mである。



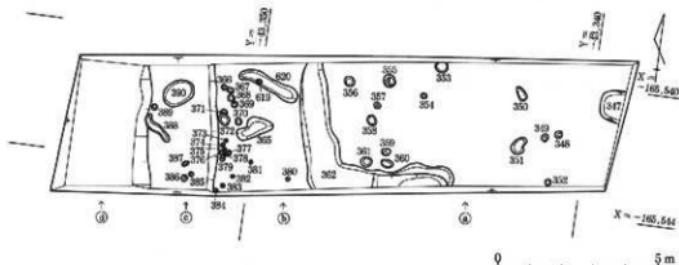
第42図 第8調査区地区割図 (S=1/400)



第43図 第8調査区柱状模式断面図 (縦S=1/40)

（2）主な遺構と遺物（第44図）

本調査区は調査区中央部を境に西と東では様相が異なっている。東半部ではピット14基と溝1条を検出した。ピットのうち7基（ピット348・349・351～353・361）には柱痕が認められた。また中央で検出した溝362はL字形に屈曲している。ピット、溝から出土した遺物の中で最も時期が下るものは中世の瓦器小片である。既往の調査結果も勘案すると、ピットは中世の掘立柱建物の柱穴であり、これらのピットの分布が溝362に囲われた内部に限られていることから、溝362は建物群の区画溝である可能性がある。一方、西半部では地山面は階段状に落ちいく。遺構は不定形な土坑以外は径0.1m程度のピットが多い。これらのピット、土坑は東半部の遺構とは埋土も異なっており、遺物も出土しなかったため、時期は不明である。



第44図 第8調査区平面図 (S=1/150)

まとめ

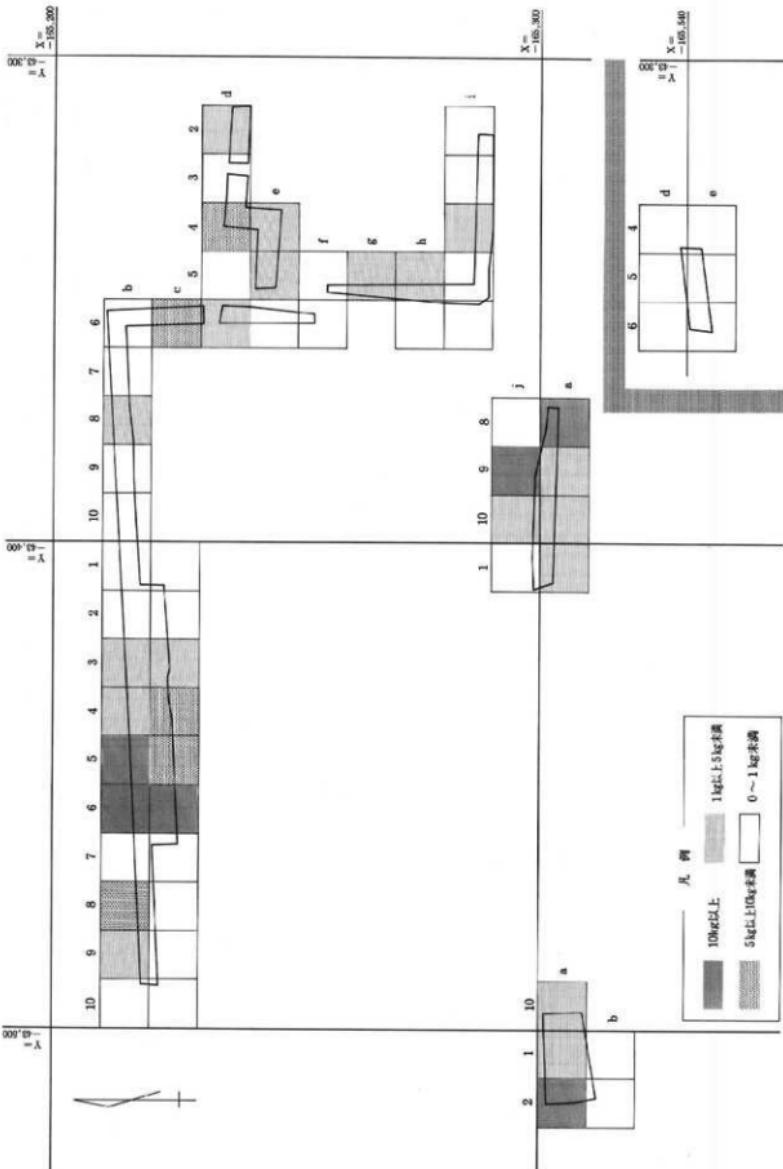
今年度の調査は新池の周辺を中心とする8調査区を設定して実施した。既往の調査では多数の遺構を検出し、中世の居館を検出するなど重要な成果も挙げているが、道路および用排水路の新設に伴う幅3~4m程度の調査区が多いために検出した遺構の性格を判断できない場合があるなど制約も多かった。今年度の調査区もまた一部を除き幅3.5~4m程度の細長い調査区であったが、既往の調査区と隣接、あるいはきわめて近い位置関係にあるために、これまでの調査結果を参照することによって新たな知見を得た。また今年度は出土遺物の水洗および注記を調査開始直後から完全に並行して進めることができたため、遺物については時代別、種別に分類し、破片数および重量を計測した。本調査区だけの検討では不十分であると思われるが、各調査区から出土した遺物量（重量）と各地区ごとの出土状況を第45図および1表に示す。近世の耕作地の造成および耕作によって大きく削平を受けている部分も多いため、こうした統計が必ずしも各時代の状況を示しているとは言えないし、各地区ごとに細かく時代別の遺物出土量をまとめる作業も不十分な段階だが、調査および整理作業を通じて得た、遺構の分布状況と遺物の出土量には一定の相関関係が認められるという大まかな見通しを前提に主要な調査結果をまとめておく。

（1）古墳時代～飛鳥時代

今回の調査では、確実に本時期と判断できる遺構は検出していない。しかし、今年度調査で出土した遺物の中では本時期の遺物が占める割合が最も高い。特に高い比率を占めているのが第1、6、7調査区であり、70パーセント前後である。第1調査区では、調査区西半部からの出土量が東半部に比べると圧倒的に多い。第6調査区出土遺物は谷上流から流れてきた遺物であることから除外すると、今年度調査区でも西端に近い部分に本時期の遺物が多く出土していると言うことができる。かねてより陶荒田神社から北に伸びる旧街道沿いの低い部分に古墳時代～奈良時代の遺構が存在していることが指摘されてきたが、第1調査区西半部および第7調査区付近にまで集落が広がっていた可能性がより高くなったと考えられる。

（2）奈良時代

奈良時代の遺構は第1調査区で検出した土坑302があるのみである。土坑302の周囲にある不定形土坑も埋土が共通しており奈良時代の遺構である可能性があるが、これを加えてもきわめて少ない。遺物の出土量を見ると、第7調査区が最も比率が高く11パーセント、次に多い第1調査区は5パーセントである（第6調査区は谷出土遺物のため、これを除く）。一方、今回調査区のうち丘陵の高所にあたる第3~5調査区では各調査区出土遺物の1パーセント程度しか占めていない。しかも重量では第1、7調査区出土量の1/20にすぎず、きわめて希薄である。第1調査区での出土状況は前代と同様西半部に集中していることから、やはり陶荒田神社から北に伸びる旧街道沿いに当該期の遺物が多いものと判断される。既往の調査結果を参考にすると、第1調査区西半部及び第7調査区付近は平成9年度第1、2調査区で検出した飛鳥時代～奈良時代の掘立柱建



第45図 遺物出土量 (S=1/1,000)

表1 出土遺物量集計表

第1調査区	古墳・飛鳥	奈良	平安	中世	近世	不明、他	計
耕作土	0	0	0	3.7	0	0	3.7
近世耕作土	19242.2	1060.1	364.7	2011.7	155.9	1515.6	24350.2
中世包含層	38482.8	2742.6	446.4	3035.1	9.8	3726.4	48443.1
遺構	7050.2	728.6	361.4	8732.8	0	948.7	17821.7
その他	186.7	99.4	0	425.3	2.1	21.7	735.2
計	64961.9	4630.7	1172.5	14208.6	167.8	6212.4	91353.9
第2調査区	古墳・飛鳥	奈良	平安	中世	近世	不明、他	計
耕作土	19.1	0	0	4.7	55.9	0	79.7
近世耕作土	0	0	0	0	0	0	0
中世包含層	0	0	0	0	0	0	0
遺構	0	0	0	9	0	0	9
その他	570.4	0	0	173.2	454	13.2	1210.8
計	589.5	0	0	186.9	509.9	13.2	1299.5
第3調査区	古墳・飛鳥	奈良	平安	中世	近世	不明、他	計
耕作土	0	0	0	0	26.1	0	26.1
近世耕作土	4005	76.2	16.1	4192.2	234.2	1098.7	9622.4
中世包含層	441.9	18.7	92.8	1983.8	0	50.1	2587.3
遺構	100.9	0	0	988.6	0	107.1	1196.6
その他	360.2	0	0	304.7	0	206.2	871.1
計	4908	94.9	108.9	7469.3	260.3	1462.1	14303.5
第4調査区	古墳・飛鳥	奈良	平安	中世	近世	不明、他	計
耕作土	632.7	6.4	0	212.8	4.1	123.5	979.5
近世耕作土	261.2	0	0	142.6	28.1	48.8	480.7
中世包含層	129.2	0	0	103.6	0	37.8	270.6
遺構	426.9	0	0	1526.5	0	115.2	2088.6
その他	309.3	0	0	99.5	48.6	40.5	497.9
計	1759.3	6.4	0	2085	80.8	365.8	4297.3
第5調査区	古墳・飛鳥	奈良	平安	中世	近世	不明、他	計
耕作土	102.9	0	0	53.2	0	24.9	181
近世耕作土	1406.3	0	6.5	689.7	67.4	361.7	2531.6
中世包含層	0	0	0	53.3	0	0	53.3
遺構	2790.6	154.3	27.9	1902.4	565.4	589	6029.6
その他	1107.4	8.6	7	495.3	116.7	348	2083
計	5407.2	162.9	41.4	3193.9	749.5	1323.6	10878.5
第6調査区	古墳・飛鳥	奈良	平安	中世	近世	不明、他	計
耕作土	905.9	0	0	153.5	123.3	152.3	1335
近世耕作土	2649.5	133.8	43	641.6	116.9	516.4	4101.2
中世包含層	0	0	0	0	0	0	0
遺構	28630	3215.1	857.1	5208.6	42.4	4294.8	42248
その他	1725.3	44.2	0	177.6	2.2	139.7	2089
計	33910.7	3393.1	900.1	6181.3	284.8	5103.2	49773.2
第7調査区	古墳・飛鳥	奈良	平安	中世	近世	不明、他	計
耕作土	1423.2	27.6	34.3	169.1	2.3	3	1669.5
近世耕作土	0	0	0	0	0	0	0
中世包含層	5912.2	383.1	14.7	737.4	0	927.6	7975
遺構	1272.2	1182.2	37.7	216.6	0	240.9	2949.6
その他	1612.6	98.5	26	309.7	0	157.4	2204.2
計	10220.2	1691.4	112.7	1432.8	2.3	1328.9	14788.3
第8調査区	古墳・飛鳥	奈良	平安	中世	近世	不明、他	計
耕作土	0	0	0	0	0	0	0
近世耕作土	144	0	0	2.4	0	0	146.4
中世包含層	0	0	0	0	0	0	0
遺構	105.7	0	0	160.9	0	2.8	269.4
その他	0	0	0	0	0	0	0
計	249.7	0	0	163.3	0	2.8	415.8

(注) 単位はg表示

物群の縁辺部にあたるものと考えられる。

(3) 平安時代

平安時代の遺構はほとんど検出していない。特に平安時代前、中期の遺構は全く検出しておらず、遺物の出土量も当丘陵が耕作地として再開発された近世を除くと本時期が最も少ない。既往の調査では新池の南に設定された平成8年度第4区で当該期の掘立柱建物が検出されており、集落の中心が移動したと考えられる。なお第3調査区でも若干量の遺物が出上しているが、遺構の多くは平安時代末～鎌倉時代と考えられことから、本時期の開発が第3～5調査区の位置する丘陵の上方にまで及んでいたかどうかは不明と言わざるを得ない。

(4) 平安時代末～中世

今回の調査では、本時期の遺構を最も多く検出した。特にピットは多数検出している。ピットには柱痕が認められ、柱穴であると考えられるものも決して少なくないが、幅の狭い調査区は掘立柱建物の復元には制約が大きい。その中で掘立柱建物は第1調査区で1棟、第2調査区で1棟を検出した。このうち第2調査区掘立柱建物274は平成7年度4b区で検出していた掘立柱建物の続きである。本建物は平成7年度4b区、6区および平成8年度第3区で検出した中世の居館と考えられる掘立柱建物群の一部をなすものである。また第4調査区で検出した溝106は居館と同時期であるが、滯水もしくはきわめて緩やかな流れであったことが埋土の状況から推測される。規模も比較的大きく堀の可能性がある。しかし居館の中心からは距離があり、また第5調査区には遺構が少なく、遺構の分布がきわめて少ない空白地がはさまると推測されることからことから、この居館に付随する施設であるかどうかは不明である。また第6調査区で検出した谷は居館の時期には埋没していなかったことは確実で、こうした谷筋を取り込んだ「居館」の構造がどのようなものであるのか、更に問題は深まった。一方、第1調査区で検出した掘立柱建物345は既往の調査結果から遺構の密度は低いと考えていた調査区西半部から検出した。付近は中世遺物包含層の遺存状況も良好であり、削平を免れた地点には予想以上に遺構が密集し、遺物も多く出土することが判明したことは成果であった。しかし先述の居館との関係は不明と言わざるを得ない。本遺跡で遺構の変遷を追えるのは鎌倉時代前半（13世紀前）までである。鎌倉時代後半以降は、遺物の出土量も減り、特に15、16世紀代の遺物はほとんど認められない。

(5) 近世

近世初頭以降の遺物は少量ながら出土している。既往の調査結果および今年度調査結果から考えて、本地の再開発は近世初頭以降着実に進められていたようである。丘陵の耕作地化は中世の集落廃絶後には始まっていた可能性があり、あるいはそれ以前にも行われていたかもしれないが、丘陵斜面を大規模に造成はじめたのは近世以降のことであり、近代以降、最近の開発以前まで丘陵西側斜面に広がっていた耕作地の景観は近世後期には成立したものと考えられる。

報告書抄録

ふりがな	とうきみなみいせきはくつちょうさがいよう							
書名	陶器南遺跡発掘調査概要・VII							
副書名	府営ほ場整備事業陶器北地区に伴う調査							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	地村邦夫							
編集機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL06-6941-0351							
発行年月日	2000年3月							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °°'	東經 °°'	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
とうきみなみいせき 陶器南遺跡	おとぎやかみなみいせき 大阪府堺市 とうききた 陶器北	27201	336	34° 30' 34"	135° 31' 38"	平成11年8月 平成12年3月	1,594m ²	府営ほ場整 備事業陶器 北地区
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
陶器南遺跡	集落	古墳時代後期 奈良時代 平安時代末～中世	土坑 掘立柱建物、溝、 土坑、谷	須恵器、土師器 須恵器、土師器 瓦器、土師器、陶 磁器				

図 版



第1調査区遺構面西半部（西から）



第1調査区遺構面西半部（東から）



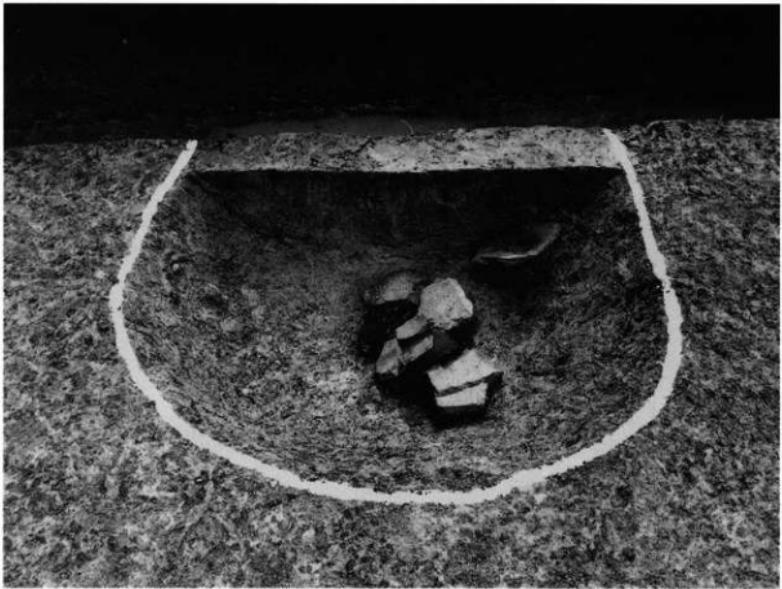
第1調査区遺構面東半部（西から）



第1調査区遺構面南端部（南から）*中央手前が土坑280



第1調査区掘立柱建物345（西から）



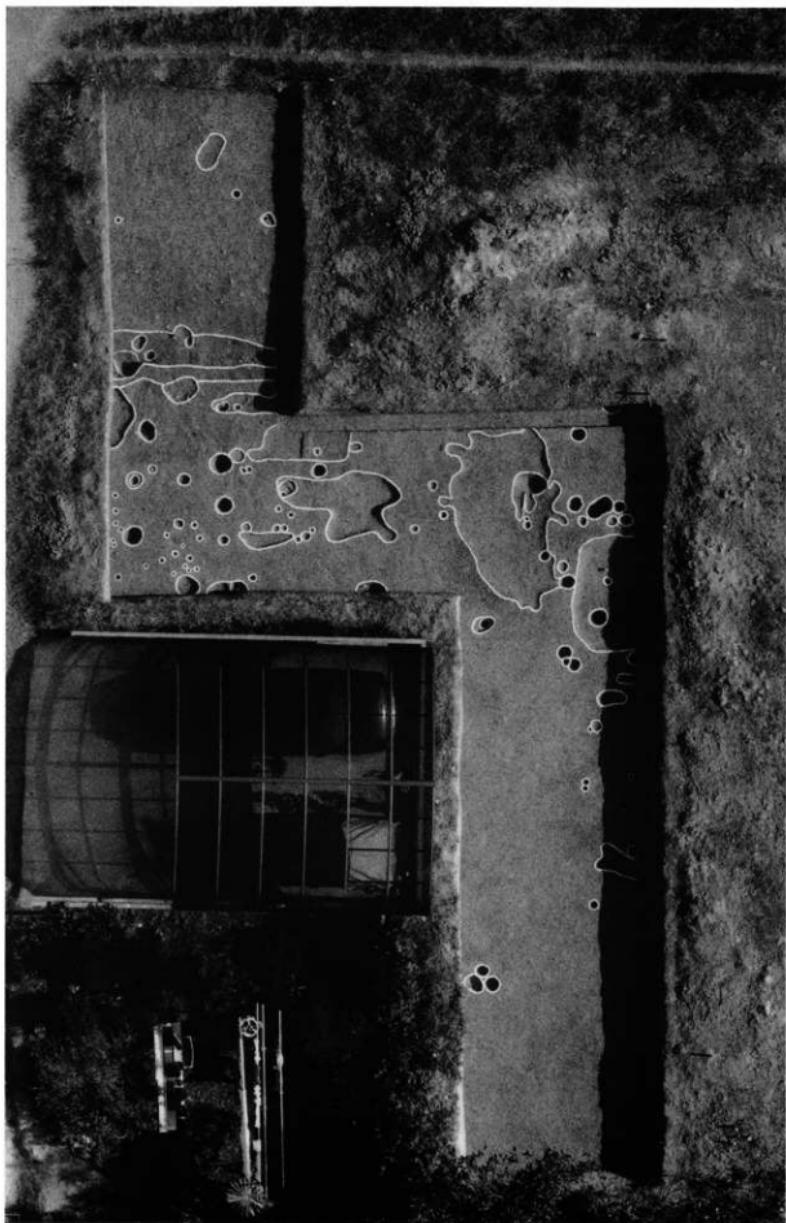
第1調査区土坑280（北から）



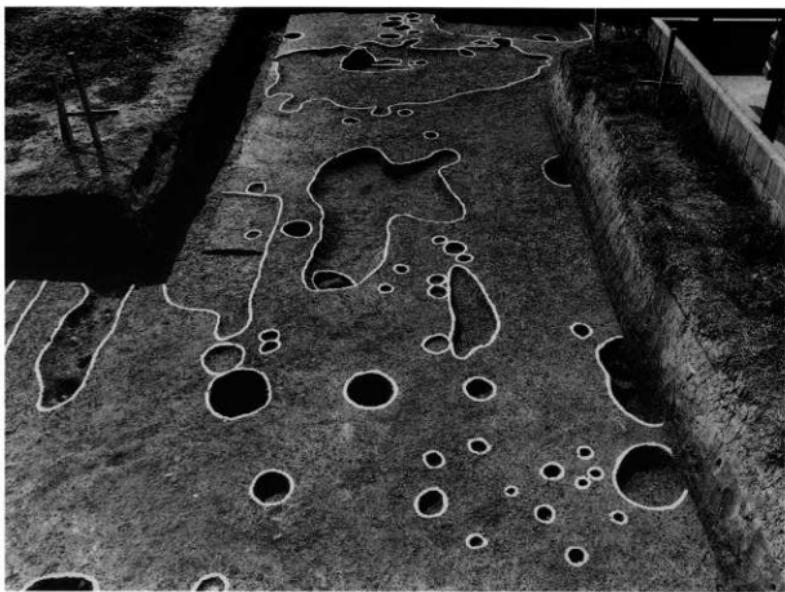
第2調査区遺構面全景（北から）



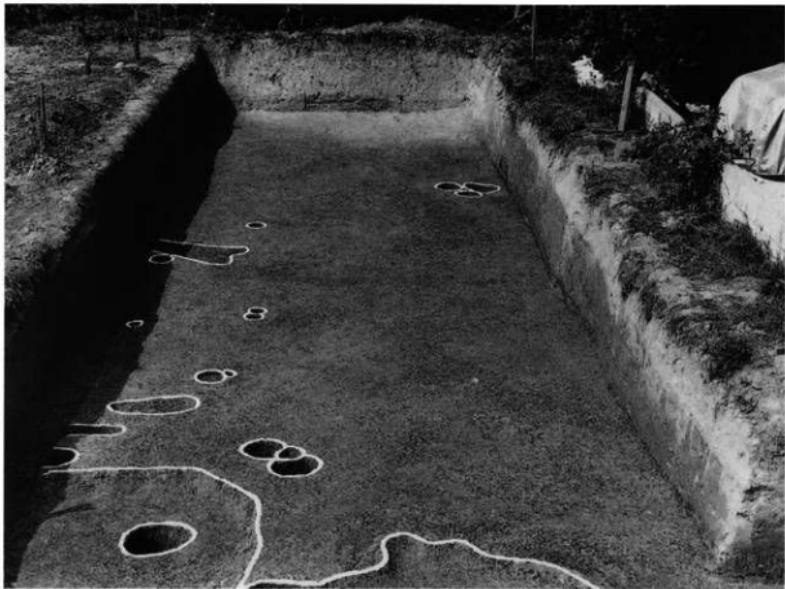
第2調査区掘立柱建物 274（南西から）



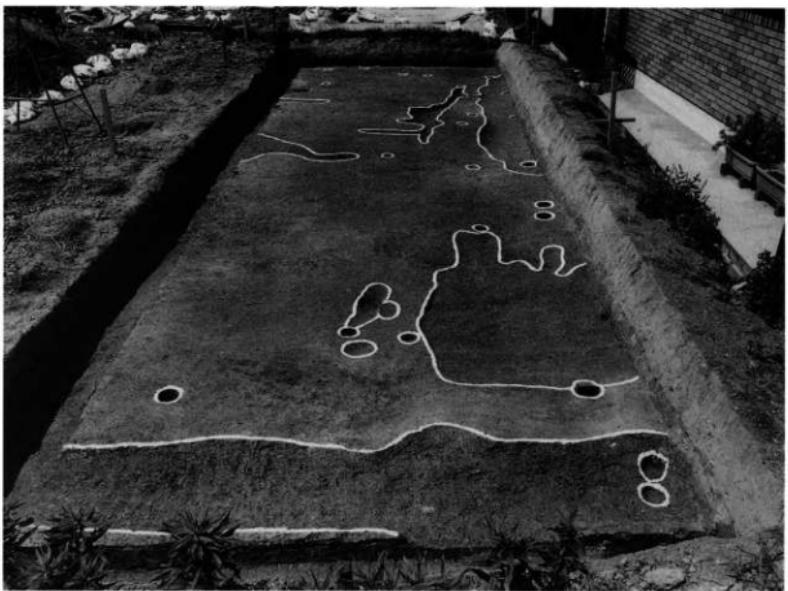
第3調査区遺構面全景（上から：左側が北）



第3調査区遺構面中央部（北から）



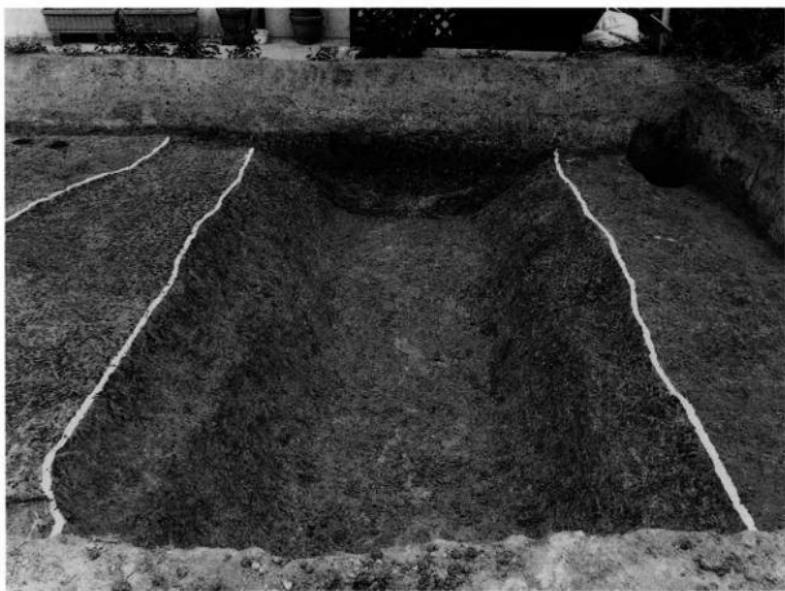
第3調査区遺構面西端部（東から）



第4調査区第1遺構面全景（東から）



第4調査区第2遺構面全景（東から）



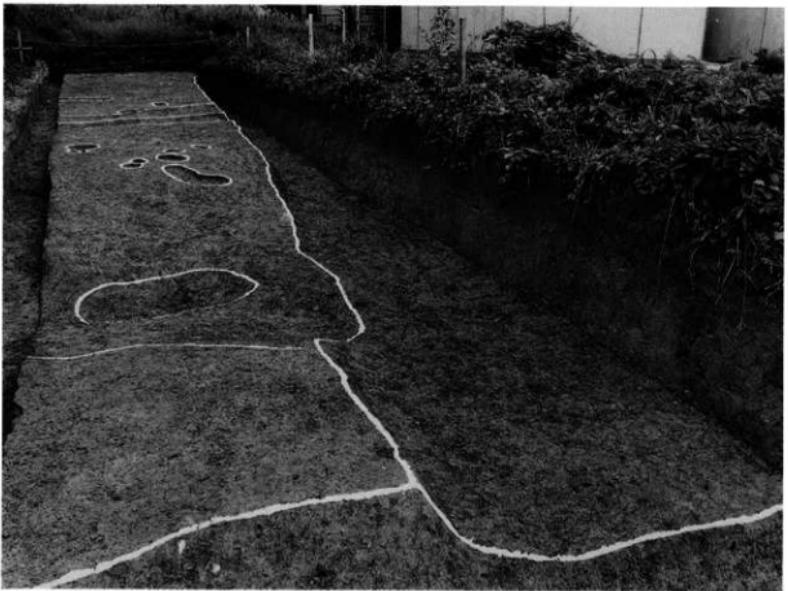
第4調査区溝106（南から）



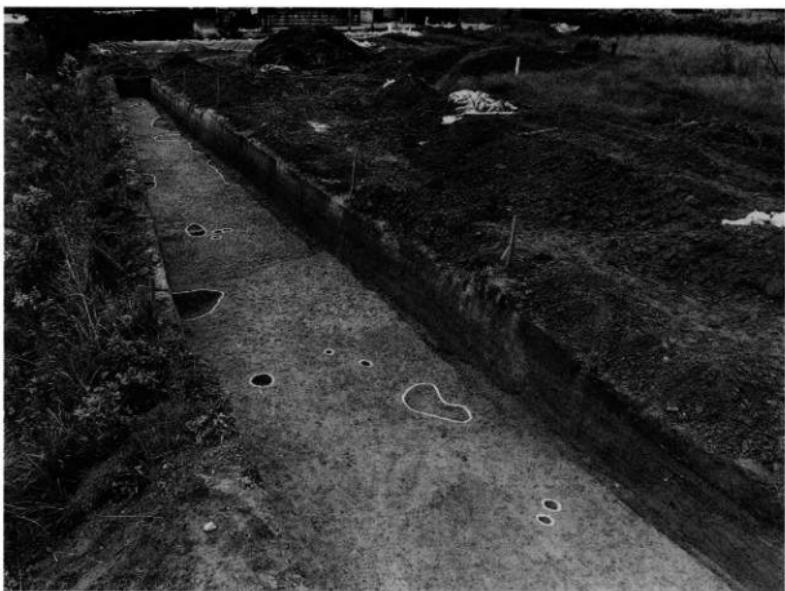
第4調査区溝106断面（北から）



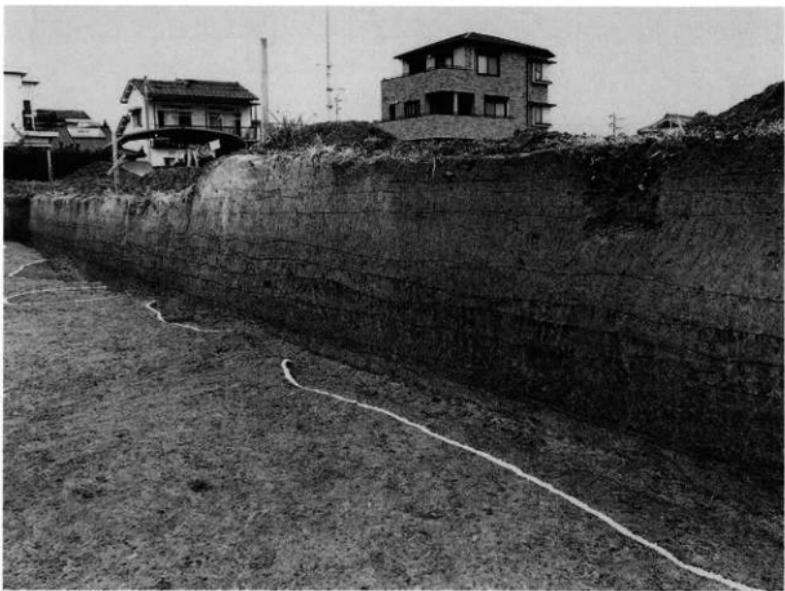
第5調査区東西方向部（西から）



第5調査区東西方向部谷 237（西から）



第5調査区南北方向部（南から）



第5調査区土層断面（E5-7-C14-f5・g5：南から）



第6調査区第1遺構面全景（南西から）



第6調査区第2遺構面全景（東から）



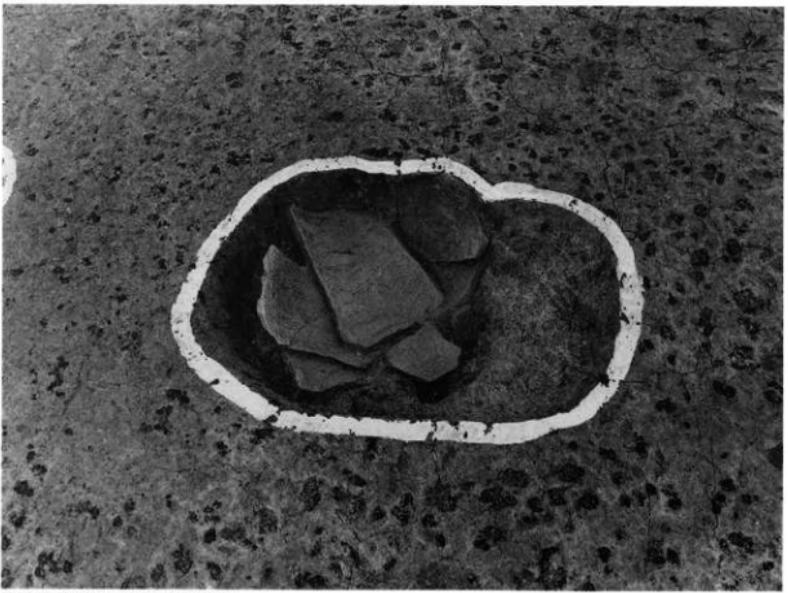
第7調査区遺構面西半部（東から）



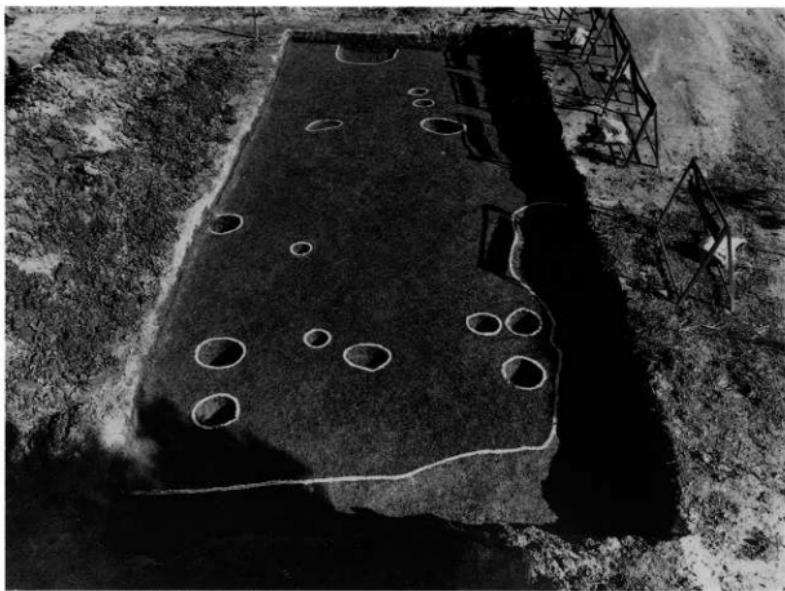
第7調査区遺構面西半部（北から）



第7調査区遺構面東半部（北西から）



第7調査区ピット9（南から）



第8調査区遺構面東半部（西から）

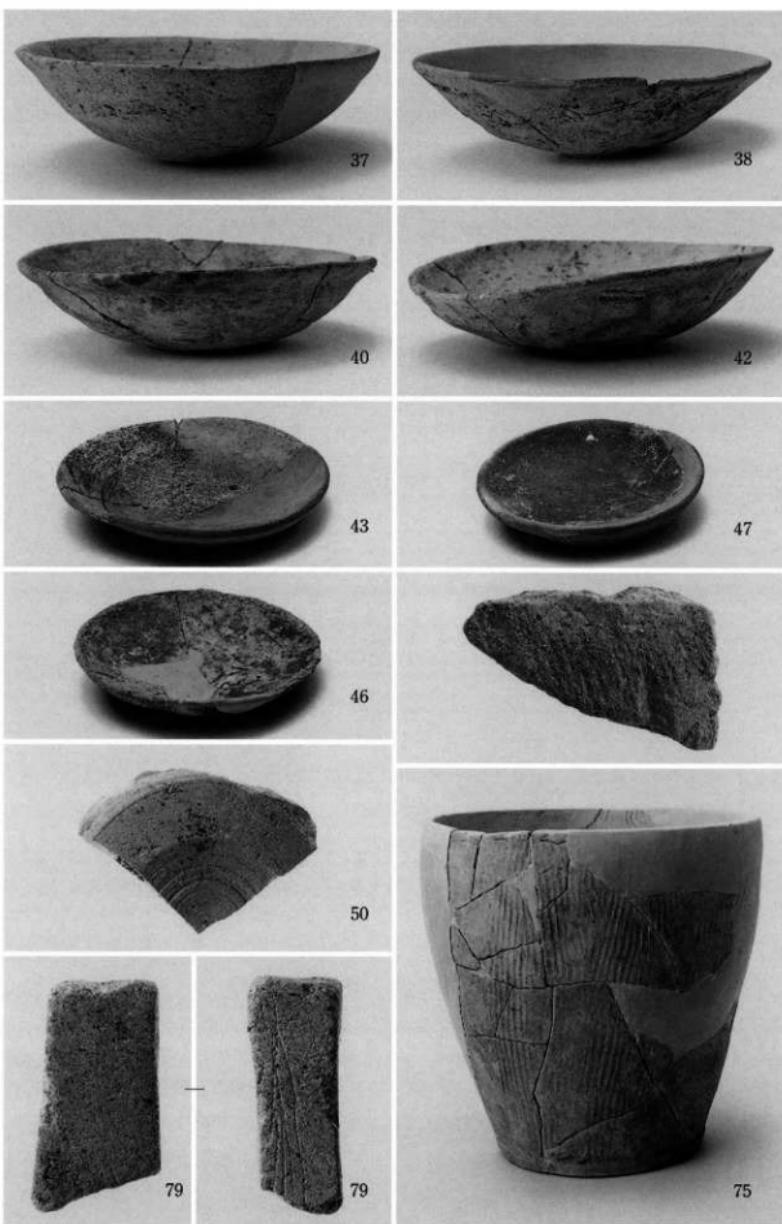


第8調査区遺構面西半部（東から）

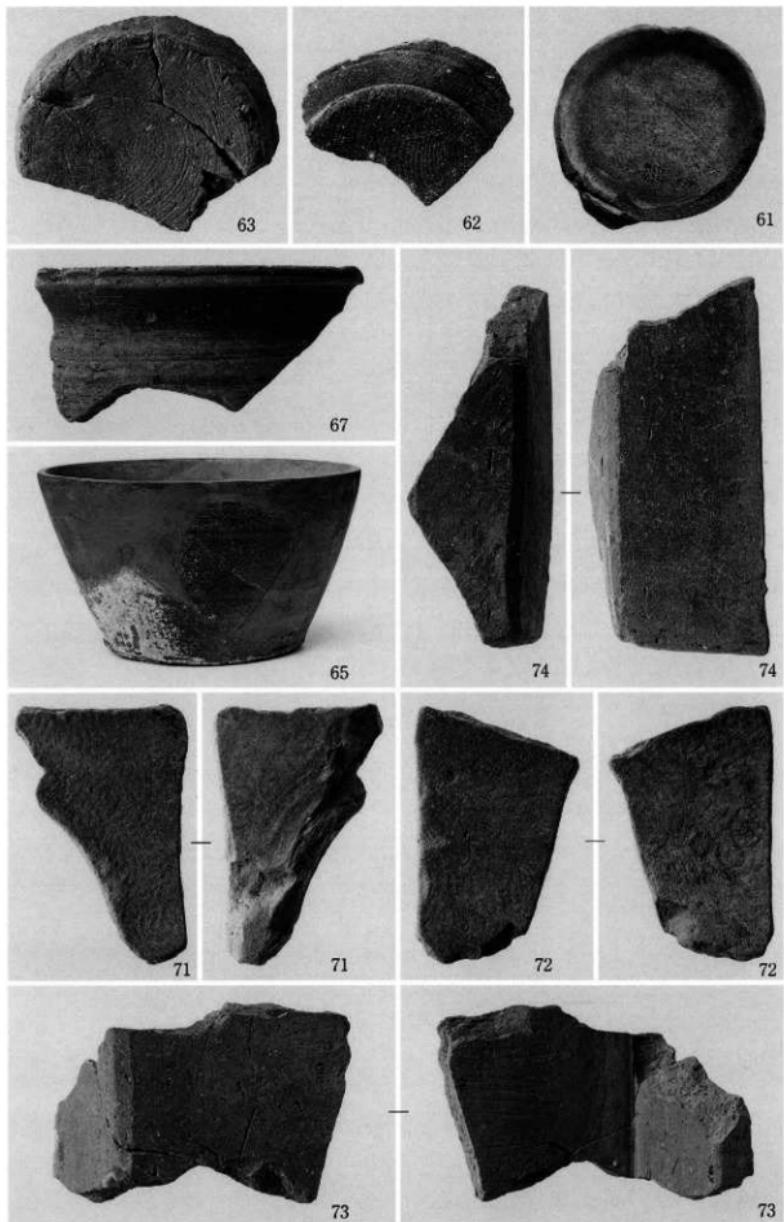
図版十五 出土遺物(一)



図版十六 出土遺物(一)



図版十七 出土遺物 (二)



陶器南遺跡発掘調査概要・VII

府営は場整備事業陶器北地区に伴う調査

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571

大阪市中央区大手前2丁目

TEL. 06-6941-0351

発行日 2000年3月

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002

大阪市東成区深江南2-6-8

